

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第35集

や た 遺 跡
矢 田

2003

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター



矢田遺跡から出土した弥生土器

序

本書は、山口県の委託を受けて財団法人山口県教育財団が実施した、町道矢山線緊急地方道路整備（代行B）工事に伴う矢山遺跡の発掘調査報告書です。

矢山遺跡の所在する豊田町は古くから山陰と山陽をつなぐ交通の要衝として栄え、現在は、南に壱峰華山を仰ぎ、ゲンジボタルの飛び交う山紫水明の町として知られています。このような自然豊かな町で行われた発掘調査では、弥生時代の人々が営んだ集落の跡が掘り出され、弥生土器をはじめ、人々の暮らしぶりを物語る生活道具が出土しました。これまで、断片的にしか知られていなかった豊田盆地における、弥生人の生活をかいま見る糸口として注目されます。

このような調査記録を収録した本書が、学術研究のみでなく、文化財への理解や郷土の歴史を学ぶ資料として、幅広く活用されることを願うものであります。

最後に、調査の実施にあたってご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

財団法人山口県教育財団
理事長 牛見 正彦

例 言

- 1 本書は、山口県豊浦郡豊田町大字矢山に所在する矢山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、町道久田線緊急地方道路整備(代行B)工事に伴い、山口県の委託を受け、財団法人山口県教育財団が実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター

調査担当 指導主事 榎 英一

指導主事 西尾 健司

調査員 有馬 啓介

- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口県豊田土木事務所、豊田町教育委員会並びに地元関係各位の協力、援助を得た。
- 5 本書の第1図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「西市」[厚秋]を複製使用したものである。第2図は、豊田町建設課提供の地図を元に作成したものである。
- 6 本書に使用した方位は、国土座標(世界標準系)で示し、標高は海拔標高(m)である。
- 7 出土遺物のうち石材鑑定は山口県立山口博物館専門学芸員 亀谷敏氏に依頼した。記して謝意を表す。なお、石材鑑定は表面観察によるものである。
- 8 本書に使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局(監修)「新版標準土色帖」Munsell方式による。
- 9 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 10 罫穴住居実測図中の柱穴内の網かけ表示は、主柱穴を表す。
- 11 土器実測図について、断面黒塗りは須恵器を示す。
- 12 本書で使用した遺構略号は、次の通りである。
SB:住居・建物 SK:土坑 SD:溝状遺構 SP:柱穴
SX:不明遺構
- 13 本書の作成・執筆は、榎・西尾・有馬が共同で行い、編集は榎が行った。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	4
1	調査に至る経緯	4
2	調査の経過と概要	4
III	遺構	9
1	竪穴住居	9
2	掘立柱建物	10
3	土坑	16
4	溝状遺構	23
5	柱穴	25
6	不明遺構	25
IV	遺物	27
1	住居・建物出土遺物	27
2	土坑出土遺物	27
3	溝状遺構出土遺物	32
4	柱穴出土遺物	34
5	不明遺構（S X 3）出土遺物	34
6	表面採集遺物	37
7	石器	39
V	まとめ	40
1	調査成果の概要	40
2	弥生時代	40
3	中世	42

表目次

第1表	掘立柱建物一覧表
第2表	土坑一覧表

図版目次

巻頭図版	矢山遺跡出土の弥生土器	図版10	住居・建物、土坑出土遺物①
図版1	矢山遺跡遠景（北から） 矢山遺跡全景	図版11	土坑出土遺物②
図版2	A地区完掘状況 B地区完掘状況	図版12	土坑出土遺物③
図版3	竪穴住居	図版13	土坑出土遺物④
図版4	掘立柱建物	図版14	土坑出土遺物⑤
図版5	土坑①	図版15	土坑出土遺物⑥
図版6	土坑②	図版16	溝状遺構出土遺物
図版7	土坑③	図版17	柱穴、不明遺構（S X 3）出土遺物①
図版8	溝状遺構	図版18	不明遺構（S X 3）出土遺物②
図版9	柱穴、不明遺構	図版19	表面採集遺物
		図版20	石器

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	第17図	溝状遺構実測図②
第2図	調査区設定図	第18図	柱穴遺物出土状況実測図
第3図	欠田遺跡遺構配置図	第19図	不明遺構（S X 3）実測図
第4図	竪穴住居実測図	第20図	住居・建物出土遺物実測図
第5図	掘立柱建物実測図①	第21図	土坑出土遺物実測図①
第6図	掘立柱建物実測図②	第22図	土坑出土遺物実測図②
第7図	建て替への掘立柱建物平面配置図	第23図	土坑出土遺物実測図③
第8図	掘立柱建物実測図③	第24図	土坑出土遺物実測図④
第9図	掘立柱建物実測図④	第25図	溝状遺構出土遺物実測図
第10図	掘立柱建物実測図⑤	第26図	柱穴出土遺物実測図
第11図	土坑実測図①	第27図	不明遺構（S X 3）出土遺物実測図①
第12図	土坑実測図②	第28図	不明遺構（S X 3）出土遺物実測図②
第13図	土坑実測図③	第29図	表面採集遺物実測図
第14図	土坑実測図④	第30図	石器実測図①
第15図	土坑実測図⑤	第31図	石器実測図②
第16図	溝状遺構実測図①		

I 遺跡の位置と環境

中国山地の西端部の山々に囲まれ、初夏に蜩舞う清流木屋川が傍らを流れる。今回調査を行った矢田遺跡は、山口県豊浦郡豊田町大字矢田に所在する、弥生時代を中心とした集落遺跡である。

豊田町は、山口県の西部、豊浦郡の内陸部に位置する。総面積は164.37km²で東西は18km、南北は18.7kmで、東は美祿市、北は長門市と天津郡油谷町と接し、西は豊北町、豊浦町、南は菊川町と境界を画している。平地が少なく、山地が町域の大半を占める。海岸部と比べて夏は暑く冬は寒い。昼夜の気温差が大きい内陸性の気候である。菊川町との境には峻峰華山が聳える。この山は県西部の最高峰で標高は713.3m、2合目には真言宗の古刹豊浦山神上寺があり霊山として名高い。西境には御嶽さんの愛称で親しまれている狗留孫山があり、真言宗修禪寺には参拝者が絶えない。北境には中国山地の分脈である長門山地の山々が連なる。一位ヶ岳と天井ヶ岳、白滝山(豊北町)である。いずれも600m級の山で瀬戸内海側と日本海側の分水嶺となっている。町内の河川は、瀬戸内海側に流れる木屋川水系と日本海側に流れる栗野川水系に大別される。人間の生活の主な舞台である平地はこれらの河川の流域に点在している。長門市依山を源流とする木屋川の中流域には町内で最も大きい豊田盆地が広がっている。木屋川の幾度かの流路変動や氾濫に伴う侵食・堆積作用で形成された沖積谷底平野である。

本遺跡は豊田盆地の北西縁、華山北東麓の丘陵先端部に位置する。南東方向に低地が広がり、稲作農耕に適した条件であったと推察される。西市小学校の運動場から豊田中央病院を経て矢田地区の南端に至る山のみもと一帯にかけては、戦前より多くの弥生土器片や磨製石器、勾玉等が発見されており、広範囲に遺物が散布・包含していることが知られてきた。昭和26年(1951年)の豊田中央病院病棟建設の際には円形の土壌より日本列島では出土例の乏しい製製用工具(鋸刀)が出土した。共伴した土器より弥生時代前期のものあると考えられている。また、昭和46年(1971年)には、矢田地区の南にある民家の排水溝工事の際に、地下1m余の所から住居か貯蔵穴ではないかと考えられる遺構が発見された。ここからは弥生時代前期のヘラ描き文様が施された土器片をはじめとして多くの遺物が出土している。翌昭和47年(1972年)、矢田地区の排水溝構築作業の際には、地下1.4mの所から多数の木製杭と弥生土器片が発見されている。このことより矢田の地では弥生時代に稲作農耕を行っていた可能性が高いと考えられている。平成4年に今回の調査地区の西、豊田中央病院の南の丘陵上で山口県埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われている。この調査では弥生時代と中世の掘立柱建物や土坑が発見されたが堅穴住居は確認されなかった。

豊田町では現在のところ縄文時代以前の遺跡は未確認である。矢田遺跡のほか豊田町に所在する弥生時代の遺跡には稲光の七社遺跡、宇内の薬師遺跡、浮石の神原遺跡(豊田西中学校遺跡)、豊田下の東長野遺跡、華山銅斧発見地がある。木屋川左岸の台地上に県立西市高等学校の実習果樹園を開発する際に発見された七社遺跡は昭和34年(1959年)に調査され、溝状遺構(環濠)や堅穴住居が確認された。さらに、弥生時代中期の土器片とともに石甕丁・紡錘車・勾玉・磨製石斧などが出土している。木屋川左岸の台地上にも早い段階から人々が集落を営み始めていたと言える。神原遺跡においても弥生時代の堅穴住居が確認されている。また、神上寺に保管されている中広形銅斧は非常に興味深い貴

重なる遺物である。寺伝によれば、華山山頂付近から4点ほど出土したとされているが、調査は行われていないため詳細は不明である。現存する1点の銅矛は県内では唯一の資料である。この中広形銅矛は弥生時代後期に「大化、異形化し、武器本来の機能を失った武器形祭器で、「大化した祭器は前方後円墳に象徴される次の時代である古墳時代への変換とともに集落から離れた大地に埋められたと考えられている。華山は豊田盆地や菊川町、豊浦町からもその姿を望める秀麗な独立峰である。玄海灘を大陸に往來する船の上からも最後まで眺められ、霊山としての歴史が古い本州西端の最高峰は広い地域に住む弥生人のいわばランドマークであったであろう。山頂に銅矛を埋納したのは常に華山の頂を望むことができる地に定住していた弥生人ではないかと推察する。

大和朝廷による統一が進められた国家の形成期には日本列島の多くの地域で前方後円墳をはじめとする墳墓が構築された。古墳はこれまでの青銅製祭器に代わって新たな権力の象徴となった。豊田町で確認されている古墳は豊田盆地の南縁の手洗・江良・飯塚地区の丘陵上に集りする。赤崎古墳、穴観音古墳、清徳寺裏古墳、上原山箱式石棺からなる手洗古墳群と江良岡田古墳群、飯塚古墳群である。小規模な円墳が大半を占める。残念ながらこれらの古墳のうち原形を留めているのは少ない。町内では広い範囲で土師器や須恵器片などの古墳時代の遺物は出土しているが集落跡の発見はまだない。

町内の稲作地帯の中心地である豊田盆地の殿敷・中村地区には大規模な条里跡(豊田条里)が残っており、中村地区では発掘調査が行われた。また、豊田盆地の北東縁にある殿敷の段丘上には7世紀末から8世紀初めにかけての須恵器の窯跡(殿敷古窯跡)があるが、この時期の集落跡も未確認である。前述の七社遺跡からは中国宋代の銅銭である祥符元宝が2点ほど出土しているが遺構は不明である。

平安時代の中頃から室町時代にかけては大内氏・厚東氏と勢力を争った防長三大豪族の一人、豊田氏の領する所となった。そのため「豊田の郷」と称せられ、殿敷一ノ瀬の居城跡などの豊田氏に関する史蹟も多い。

近世に入り、毛利氏の萩入府により、町域の大部分は長府藩に属したが、殿居村・地吉村・殿敷村は萩藩に属した。赤間関街道北道筋や肥中街道、厚狭街道などが交差する交通の要地であった西市は宿場町として栄えた。明治になり町域は4つの村に統合され、昭和29年(1954年)、殿居村・豊田中村・西市町・豊田下村の1町3村が合併し、現在に至る。

参考文献

- ・豊田町史編纂委員会「豊田町史」1979年
- ・豊田町教育委員会「1日で見ると豊田の歴史と文化」1999年
- ・山口県「山口県史 資料編 考古1」2000年
- ・山口県教育会編「山口県百科事典」大和書房 1982年
- ・白岡太「最近の調査から―矢田遺跡―」『陶墳』第7号 山口県埋蔵文化財センター 1994年
- ・西岡義典編「梅本遺跡 表ヶ台遺跡 豊田条里遺跡」山口県埋蔵文化財調査報告 第66集 山口県教育委員会 1982年
- ・山口県教育委員会「とよた」『山口県埋蔵文化財調査報告』第83集 1985年
- ・前田耕次編「とよたⅡ」『山口県埋蔵文化財調査報告』第97集 財団法人山口県教育財団 1986年
- ・小野忠徳「山口県の考古学」吉川弘文館 1985年
- ・小野忠徳編「日本の古代道跡30 山口」保育社 1986年
- ・岡分直一「製銅用工具かと思われる石器について」『古代文化』2巻7号 古代学協会 1958年
- ・近藤喬一「銅剣・銅鐔と弥生文化」『古代出土文書は存在したか』山陽中央新聞社 1985年
- ・白井泰臣 小川國治 三浦重修「山口県風土記」旺文社 1990年
- ・奈良本辰也 三坂未治監修「山口県の地名」『日本歴史地名大系』36 平凡社 1980年



- | | | | |
|-------------|-----------|----------|-----------|
| 1 矢田遺跡 | 2 七社遺跡 | 3 薬師遺跡 | 4 神原遺跡 |
| 5 東長野遺跡 | 6 華山銅矛発見地 | 7 手洗古墳群 | 8 江良岡田古墳群 |
| 9 飯塚古墳群 | 10 農田条里 | 11 殿敷古窯跡 | 12 一ノ瀬城跡 |
| 13 豊田氏一ノ瀬館跡 | | | |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

II 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

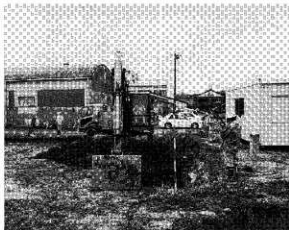
山口県豊浦郡豊田町大字矢田地区には弥生時代を中心とした集落遺跡が埋蔵されていることは以前から知られていた。当該地区内に町道矢田線緊急地方道路整備(代行B)工事が計画され、豊田町教育委員会より埋蔵文化財確認調査依頼を受けた山口県教育委員会文化財保護課は平成13年5月に試掘による事前調査を実施した。調査の結果、弥生時代のもと考えられる柱穴や土坑などの遺構が検出され、扁平片刃石斧、弥生土器等の遺物が確認された。その結果を踏まえ、県教育委員会と豊田町教育委員会、山口県豊田土木事務所による協議が行われ、工事により遺跡が破壊される範囲(1,000㎡)について記録保存を図るため、事前に発掘調査を行うこととなった。調査は財団法人山口県教育財団が山口県の委託を受け、平成14年4月より行うこととなった。

2 調査の経過と概要

平成14年4月中旬より発掘調査の事前準備を開始した。18日には遺構面確認のためのトレンチ調査を行った。その結果、耕土下20~30cmに遺構面の広がりを確認した。4月25日から5月1日にかけては調査区内に重機を入れて表土除去を行い、新土の下の遺構面が姿を表した。この時点で多数の遺構が確認された。並行して4月26日にプレハブ事務所を設置した。

調査区は、西側の水田であった所をA地区とし、下がって東側の畑地であった所をB地区と設定した。5月9日から作業員を入れての遺構検出に取りかかった。遺構検出は西側に位置するA地区から開始した。A地区では多数の柱穴、土坑等が検出されるとともに、北東の調査区境界付近では竪穴住居が確認された。5月13日、14日には国土座標杭が設置された。5月20日からはB地区の遺構検出を開始した。B地区では柱穴、溝等が検出された。これに並行して平板測量を行い、遺構の配置状況を確認し、今後の調査方針の検討を行った。

5月21日からA地区の遺構の掘り込み作業に取りかかった。土坑の掘り込みを中心に作業は進められた。調査区の下には暗渠が走っており、遺構掘り込み後に水が湧き出ることが何度もあり、特に降雨後は排水作業に追われた。また、調査区外に盛った排土が崩れ落ちることを防ぐために、周りに杭



重機による表土除去



遺構検出

を打ち、板を張って、隣接する畑への上砂の流入を防いだ。遺構の写真撮影や実測は掘り込み作業後に並行して行った。A地区の遺構であるSX3からは多くの弥生土器が出土し、特に注意を払いながら調査を行った。堅穴住居、土坑、溝、柱穴等の遺構からは弥生土器とともに大型蛤刃石斧や石鏃、石施丁等の石器も発見された。6月7日からはB地区の掘り込みも開始した。B地区は排水路よりも低く位置し、少雨でも湧水が見られ、作業が度々寸断されることとなった。しかし、雨のため作業が中止となる日が少なく、調査は順調に進み、6月下旬には再度遺構検出を行って発掘調査を確実なものとした。

7月に入ってからは残された遺構の掘り込みを行った。また、遺跡の清掃作業や資料準備をして現地説明会に備えた。調査区内の排水には特に時間を費やした。

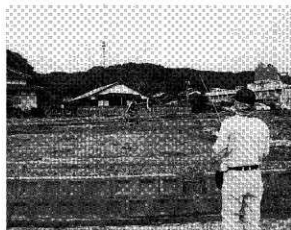
7月6日に現地説明会を行った。天候も回復し、地元の方々を中心に約50名の参加者があった。多くの遺物が出土した遺構の周りにはたくさんの人集りができた。また、遺物はプレハブ事務所内に展示した。

現地説明会後は現地での発掘調査の仕上げに入った。調査区内の清掃後、7月9日にラジコンヘリコプターを用いて遺跡の空中写真撮影を行った。時々雨が降る悪条件ではあったが何とか撮影を終えた。7月10日から16日までグリッド実測を行った。7月17日にプレハブ事務所を撤去し、豊田土木事務所担当者との立会を経て、現地での調査を全て終了した。

3ヶ月間の調査の結果、弥生時代を中心とした貴重な資料が多数出土した。梅雨時にまたがる調査ではあったが、事故や怪我もなく無事に終えることができた。現地での調査後、山口県埋蔵文化財センターにおいて、これらの調査資料の整理、出土遺物の復元と実測及び写真撮影を行い、この報告書を刊行するに至った。



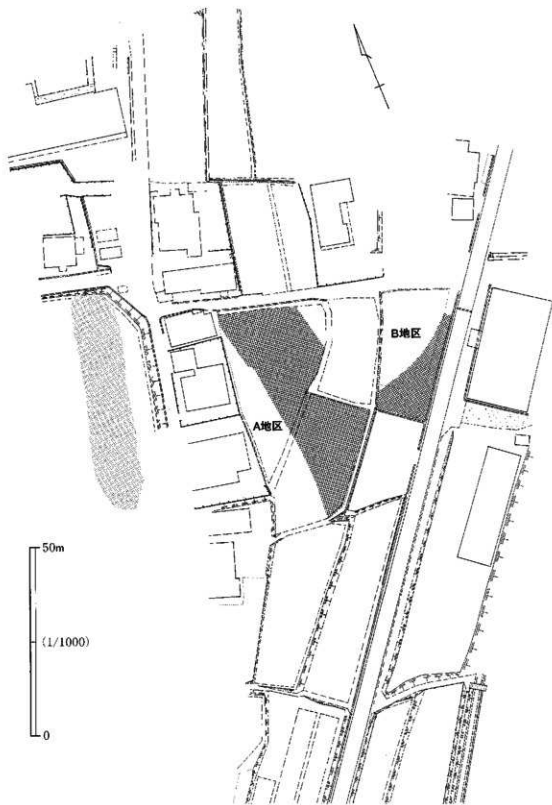
遺構の掘り込み




空中写真撮影



現地説明会



 :平成14年度発掘調査区

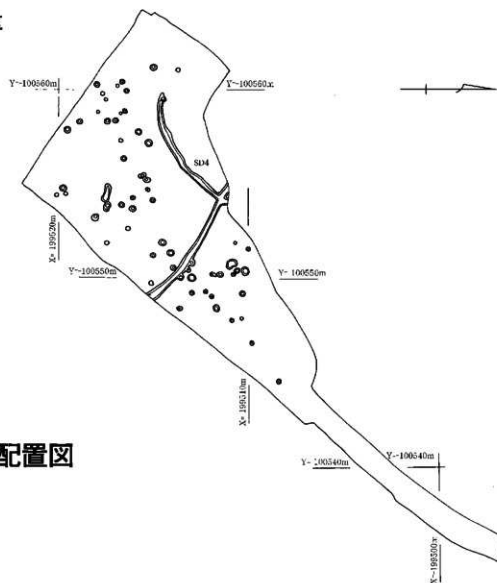
 :平成4年度発掘調査区

第2図 調査区設定図

A地区



B地区



第3図 矢田遺跡遺構配置図

遺構略号凡例

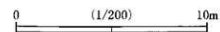
SB : 住居・建物

SK : 土坑

SD : 溝状遺構

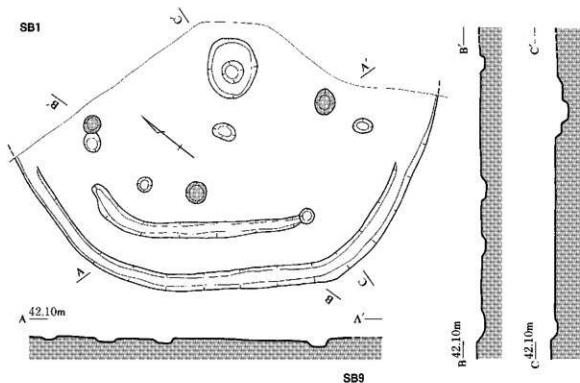
SP : 柱穴

SX : 不明遺構



Ⅲ 遺 構

今回の発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居2軒、掘立柱建物15棟、土坑40基、溝状遺構5条、柱穴約500個、それに不明遺構が2基である。これらの遺構は、出土遺物などから、弥生時代前期末～中期のものが大半を占め、中に中世のものが混じると考えられる。これは、後世の水田開発による削平のため、遺跡上面に存在したであろう、中世の遺構が削り取られたものと考えられる。しかし、柱穴は浅くなっているが、掘立柱建物については中世のものを多数確認できる。遺構は調査区のA地区北西部とB地区北端で密度がうすいが、その他の地域ではほぼ全面から検出されている。特徴的な遺構としては、弥生時代の竪穴住居と掘立柱建物、弥生時代のものと思われる溝、それに中世の掘立柱建物があげられる。(第3図)

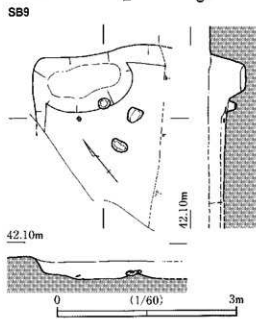


1 竪穴住居 (第4図、図版3)

今回検出された竪穴住居は2軒であるが、どちらも調査区端に位置しているため、全容を確認することができなかった。また削平を受けていたため、遺存状況も良好とは言えないが、平面形は一つが不整形を呈し、一方が隅丸方形を呈すると推定できる。

SB1 (第4図、図版3)

A地区北端に位置する。調査区外にかかるため、一部を確認できないが、平面形は不整形を呈する直径7.2mの竪穴住居であると推定できる。主柱穴は5、6本と考えられるが、確認できるのは3本である。中心には直径1mの土坑が2段に掘り込まれている。また、壁は削平されて



第4図 竪穴住居実測図

いたが、周囲には幅30cmの壕溝が巡っている。更に、60cm内側にも溝が一部で確認された。埋土は、褐色粘質土の単一層からなる。出土遺物は、弥生土器の甕（1）、甕（3）、ミニチュア土器の鉢（2）、土製の円盤（4）などである。この住居の時期は弥生時代前期末に比定される。

SB9（第4図、図版3）

A地区の西中央部に位置する。調査区外と水田造成時の削平により、北西部を確認するのみであるが、主柱穴2本ないし4本の隅丸方形窪穴住居であると推定される。北西隅には長軸1.7m短軸1m、深さ30cmの長円形の土坑が掘り込まれている。埋土はマンガン粒を含む褐色粘質土の単一層である。出土遺物には弥生土器の甕や甕がある。この住居の時期は弥生時代中期と推定される。

2 掘立柱建物（第5～10図、図版4）

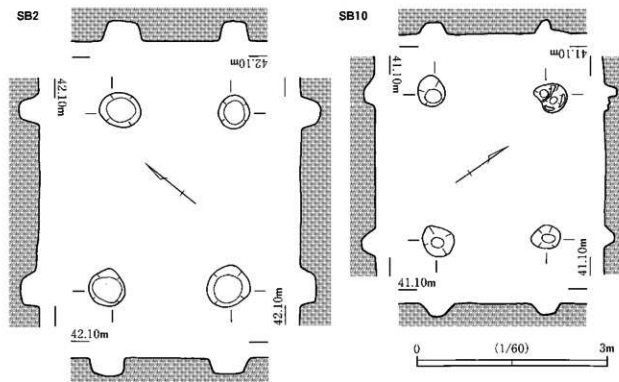
今回の調査で多数の柱穴が検出され、その中から掘立柱建物が15棟復元できた（第1表）。出土遺物、規模から弥生時代のものが4棟、中世のものが11棟であると考えられる。弥生時代のものは比較的規模が小さく、倉庫として利用された可能性が高いとみられる。

SB2（第5図、図版4）

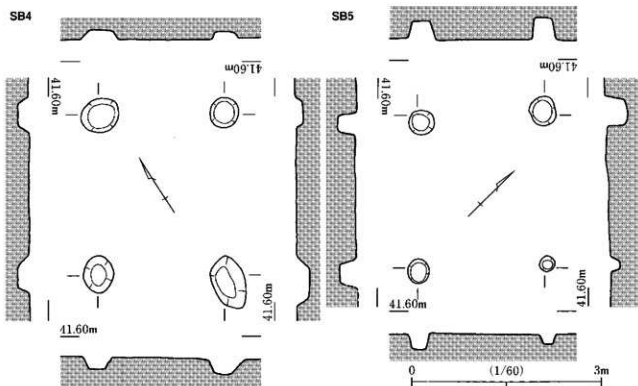
A地区北東部に位置する。規模は1間×1間の建物である。棟方向はN50°E。柱間平均寸法は桁行方向2.80m、梁行方向1.90m。柱穴の規模は直径54～80cm、深さ24～30cm。柱穴から弥生土器片の甕（7・8）が出土。この建物の時期は弥生時代前期末に比定され、SB1に伴う倉庫である可能性があろう。

SB10（第5図、図版4）

A地区北中央部に位置する。規模は1間×1間の建物である。棟方向はN56°W。柱間平均寸法は桁行方向2.34m、梁行方向1.80m。柱穴の規模は直径42～50cm、深さ18～30cm。柱穴からは弥生土器片が出土。この建物の時期は弥生時代に比定される。



第5図 掘立柱建物実測図①



第6図 掘立柱建物実測図②

SB4 (第6図、図版4)

A地区南東部に位置する。規模は1間×1間の建物である。棟方向は $N33^{\circ}E$ 。柱間平均寸法は桁行方向2.55m、梁行方向2.04m。柱穴の規模は直径45~90cm、深さ12~18cm。柱穴から弥生土器片が出土。この建物の時期は弥生時代に比定される。

SB5 (第6図、図版4)

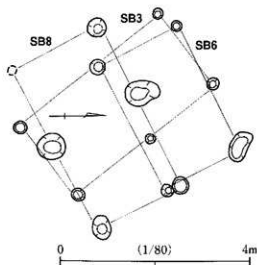
A地区南中央部にSB4に平行して位置する。規模は1間×1間の建物である。棟方向は $N41^{\circ}W$ 。柱間平均寸法は桁行方向2.40m、梁行方向2.04m。柱穴の規模は直径24~45cm、深さ15~30cm。柱穴から弥生土器片が出土。この建物は弥生時代に比定される。

SB3 (第8図、図版4)

A地区西中央部に位置し、規模は2間×1間の建物である。棟方向は $N38^{\circ}W$ 。柱間平均寸法は桁行方向1.98m、梁行方向1.80m。柱穴の規模は直径18~36cm、深さ18~54cm。柱穴からは弥生土器片が出土したが、規模や他の中世建物群の棟方向等からみて、この建物は中世に属するものであると推定される。

SB6 (第8図、図版4)

A地区西中央部にSB3に重なって位置する。規模は1間×1間の建物である。棟方向は $N61^{\circ}E$ 。柱間平均寸法は桁行方向2.88m、梁行方向1.95m。柱穴の規模は直径27~75cm、深さ18~30cm。柱穴から弥生土器片(甕)、土師器片が出土。この建物の時期は中世に比定される。



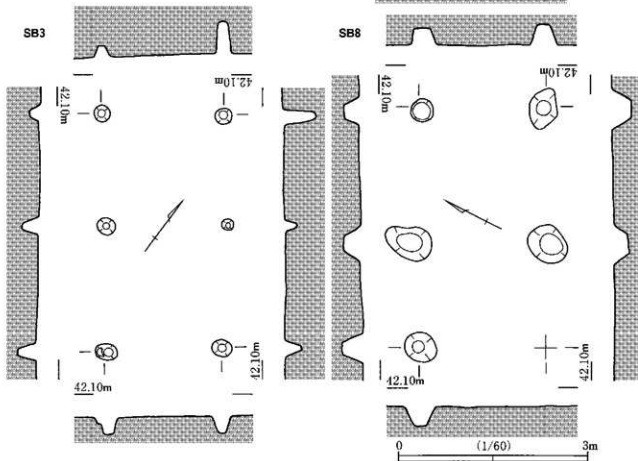
第7図 建て替への掘立柱建物平面配置図

SB 8 (第8図、図版4)

A地区西中央部にSB 3、SB 6に重なって位置する。規模は2間×1間の建物である。棟方向はN 63° E。柱間平均寸法は桁行方向1.88m、梁行方向2.04m。柱穴の規模は直径36~75cm深さ24~36cm。柱穴からは弥生土器片の壘(5)が出土しているが、位置、規模から考え、重なる2棟同様中世の建物と考えられ、この3棟は建て替えの可能性が高いとみられる。(第7図)

SB11 (第9図)

A地区北中央部に位置する。規模は1間×1間の建物である。棟方向はN36° E。柱間平均寸法は桁行方向3.84m、梁行方向1.41m。柱穴の規模は直径42

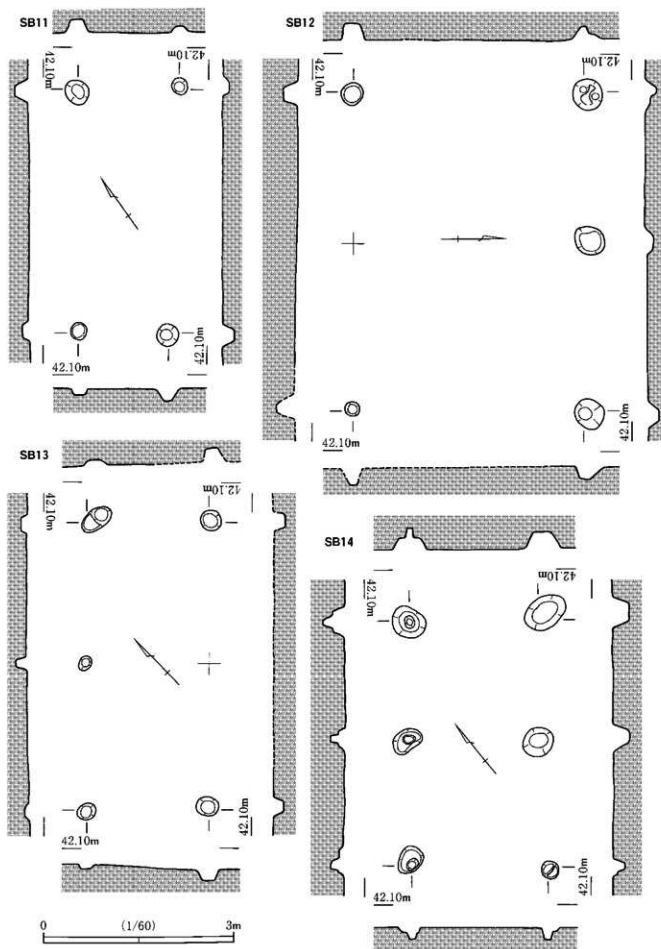


第8図 掘立柱建物実測図③

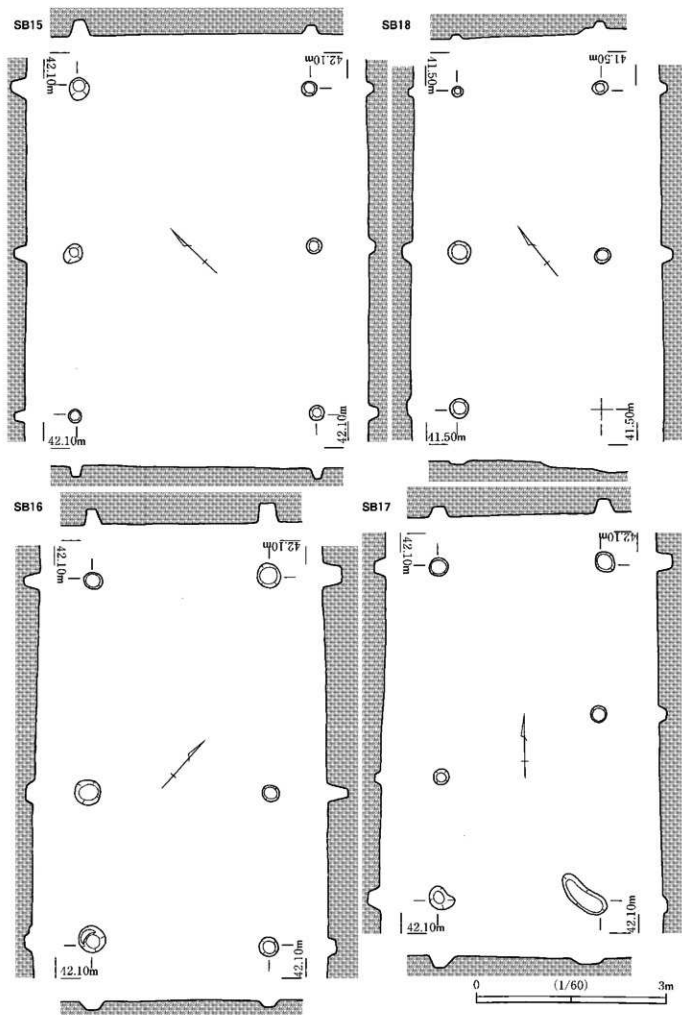
~50cm深さ18~30cm。時期は中世であると考えられる。

SB12 (第9図)

A地区北中央部に位置する。規模は2間×1間。この遺跡では比較的大きな建物である。棟方向はN90° E。柱間平均寸法は桁行方向2.50m、梁行方向3.69m。柱穴の規模は直径24~48cm、深さ21~42cm。柱穴からは弥生土器片、陶磁器片が出土。この建物の時期は中世に比定される。



第9図 掘立柱建物実測図④



第10图 独立柱建物实测图⑤

SB13 (第9図)

A地区北中央部に位置する。規模は2間×1間の建物である。棟方向はN45° E。柱間平均寸法は桁行方向2.28m、梁行方向1.95m。柱穴の規模は直径18~54cm、深さ9~18cm。柱穴からは弥生土器片、土師器片が出土。時期は中世と比定される。

SB14 (第9図)

A地区東部に位置する。規模は2間×1間の建物である。棟方向はN40° E。柱間平均寸法は桁行方向1.94m、梁行方向2.16m。柱穴の規模は直径27~66cm、深さ18~36cm。柱穴からは弥生土器片、土師器片が出土。時期は中世と比定される。

SB15 (第10図)

A地区中央部に位置する2間×1間の建物である。棟方向はN47° E。柱間平均寸法は桁行方向2.60m、梁行方向3.84m。柱穴の規模は直径18~33cm、深さ10~27cm。時期は中世と推定される。

SB16 (第10図)

A地区中央部に位置する。規模は2間×1間の建物である。棟方向はN42° W。柱間平均寸法は桁行方向2.87m、梁行方向2.82m。柱穴の規模は直径27~42cm、深さ12~33cm。柱穴から弥生土器片、土師器片が出土。時期は中世と比定される。

SB17 (第10図)

A地区中央部に位置する。規模は2間×1間の建物である。棟方向はN1° E。柱間平均寸法は桁行方向2.63m、梁行方向2.40m。柱穴の規模は直径27~72cm、深さ9~36cm。柱穴から弥生土器片、土師器片が出土。時期は中世と比定される。

SB18 (第10図)

A地区南東部に位置する2間×1間の南北方向に長い建物である。棟方向はN36° E。柱間平均寸法は桁行方向2.51m、梁行方向2.25m。柱穴の規模は直径15~36cm、深さ6~18cm。後世の削平をかなり受けている。柱穴から弥生土器片の莖(6)が出土したが、規模から中世の建物と思われる。

第1表 独立柱建物一覧表

地区	遺構番号	規模(間)	棟方向	柱 間		出 土 遺 物	時 代	
				桁 行 建物の南西隅から(m)	梁 行 建物の南西隅から(m)			
1	A	SB2	1×1	N50° E	2.80	1.90	弥生土器(莖)	弥生
2	A	SB3	2×1	N38° W	3.78(1.98・1.80)	1.80	弥生土器	中世
3	A	SB4	1×1	N33° E	2.55	2.04	弥生土器	弥生
4	A	SB5	1×1	N41° W	2.40	2.04	弥生土器	弥生
5	A	SB6	1×1	N61° E	2.88	1.95	弥生土器(莖) 土師器	中世
6	A	SB8	2×1	N63° E	3.75(1.65・2.10)	2.04	弥生土器(莖)	中世
7	A	SD10	1×1	N56° W	2.34	1.80	弥生土器	弥生
8	A	SB11	1×1	N36° E	3.84	1.41	弥生土器	中世
9	A	SB12	2×1	N90° E	5.01(2.61・2.40)	3.69	弥生土器 陶磁器	中世
10	A	SB13	2×1	N45° E	4.56(2.34・2.22)	1.95	弥生土器 土師器	中世
11	A	SB14	2×1	N40° E	3.87(2.01・1.86)	2.16	弥生土器 土師器	中世
12	A	SB15	2×1	N47° E	5.19(2.55・2.64)	3.84	弥生土器	中世
13	A	SB16	2×1	N42° W	5.73(2.34・3.39)	2.82	弥生土器 土師器	中世
14	A	SB17	2×1	N1° E	5.25(1.89・3.36)	2.40	弥生土器(莖) 土師器	中世
15	A	SB18	2×1	N36° E	5.01(2.46・2.55)	2.25	弥生土器(莖)	中世

3 土坑（第11～15図、図版5～7）

今回の調査で40基の土坑が確認された。平面形は、円形が5基、長円形が12基、不整形が23基で、不整形が最も多かった（表2）。出土遺物から弥生時代と考えられるものが多く29基を数える。次いで中世と考えられるものが6基混在し、遺物の出土がなかったものが5基である。後世の削平のため浅いものが多い。以下、代表的なものを取り上げる。

SK1（第11図、図版5）

A地区の中央東端部に位置し、南東部分が調査区外にかかる不整形の土坑である。規模は長軸310cm、短軸270cm。上部から10cmの深さにテラスが巡り、中心部が深さ47cmに掘り窪められている。土坑からは、弥生時代前期末を中心とした壺（10・12）や甕（11・13・14・15）が破損した破片の状態でも多数出土した。中には甕の蓋（9）も見られる。底部から出土した土器は比較的残存状況の良いものが見られたが、テラス上や上層部から出土した土器は摩滅が激しいものがほとんどである。破損した土器を廃棄した穴に土器片が流れ込んだ、弥生時代前期末の土坑と考えられる。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。

SK2（第11図、図版5）

A地区の北中央部に位置する長円形の土坑である。規模は長軸250cm、短軸110cm、深さ24cm。西側にテラスを形成し、中央を掘り窪めている。弥生時代前期と思われる壺（16）や甕（17・18・19・20）が出土した。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。出土遺物などからみて、弥生時代前期後半の廃棄土坑であると考えられる。

SK3（第12図、図版5）

A地区の中央部に位置する不整形の土坑である。規模は長軸232cm、短軸208cm、深さ25cm。弥生土器の壺や甕（40）が出土。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。遺物から、弥生時代中期前半の土坑と考えられる。

SK5（第12図、図版5）

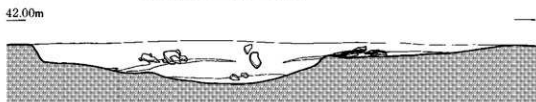
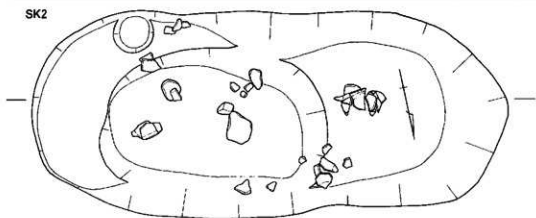
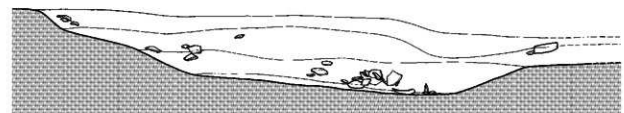
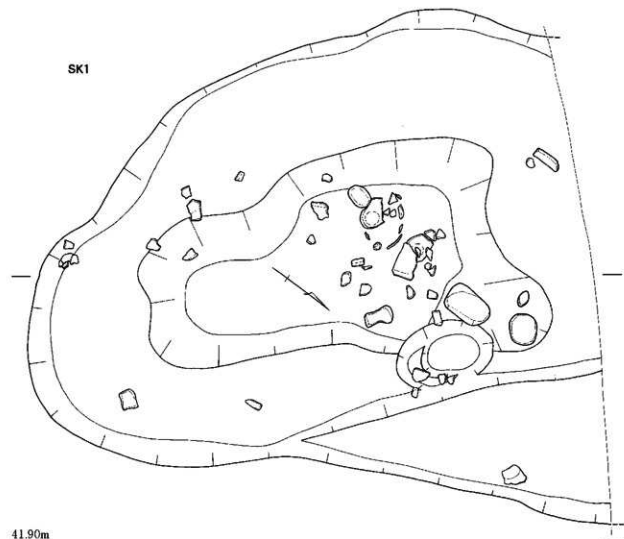
A地区の北端部に位置する長円形の土坑である。規模は長軸144cm、短軸120cm、深さ20cm。弥生時代前期の壺や甕の底部（38）が出土。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。時期は弥生時代前期と考えられる。

SK6（第13図）

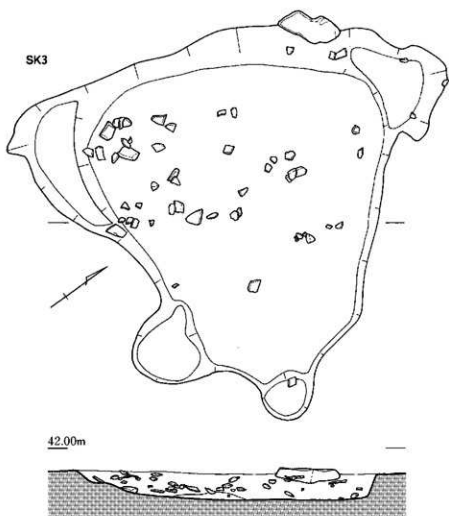
A地区の北西部に位置する不整形の土坑である。北西端に2段のテラスを形成し、規模は長軸353cm、短軸118cm、深さ33cm。弥生時代中期と見られる壺（39）、石甕（121）が出土し、埋土は黒褐色粘質土の単一層。弥生時代中期の土坑と考えられる。

SK7（第13図、図版5）

A地区の北東部、SB1を切る形で掘り込まれた不整形の土坑である。規模は長軸310cm、短軸145cm、深さ26cm。弥生土器の壺（21・22）、甕（23・24）の底部、太型蛤刃石斧（130）、扶入柱状片刃石斧（125）が底に投げ込まれた様子が出土した。埋土は黒褐色粘質土の単一層。弥生時代前期末、SB1廃絶後掘り込まれた廃棄土坑と考えられる。

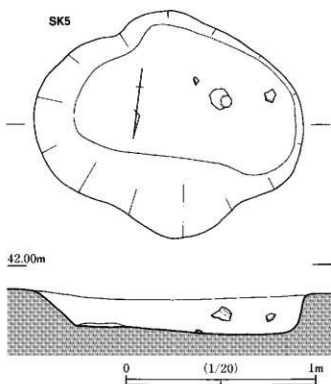


第11圖 土坑実測図①

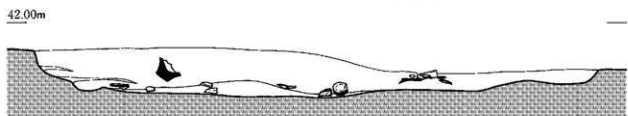
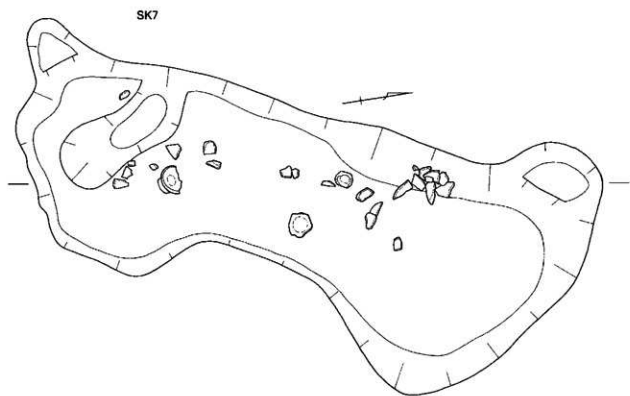
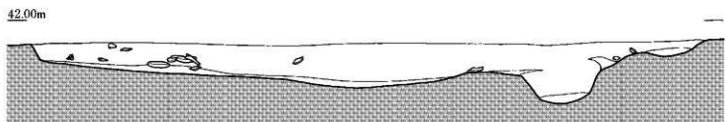
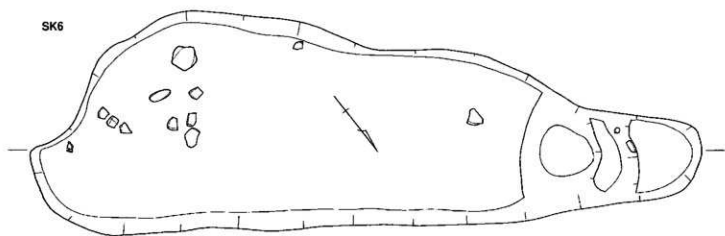


SK 8 (第14図、図版6)

A地区中央部に位置する長円形に掘り込まれた土坑である。規模は長軸165cm、短軸156cm、深さ20cm。文様の施された弥生土器の壺(25・26・28~36)、甕(27)、円石(131)など、多くの遺物が出土した。どれも完形のものではなく、土器片が重なり合うように廃棄された状態で出土した。器面の摩滅は見られるものの、施文の比較的残りの良い遺物が多いのが特徴である。復元できた土器が見られないことから、割れてしまった土器片を集めて捨てたと考えられる。埋土は黒褐色粘質土の単一層。出土した土器から弥生時代前期末の廃棄土坑であると考えられる。



第12図 土坑実測図②

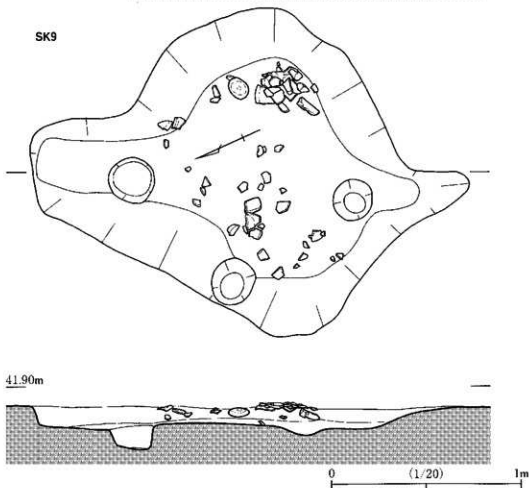
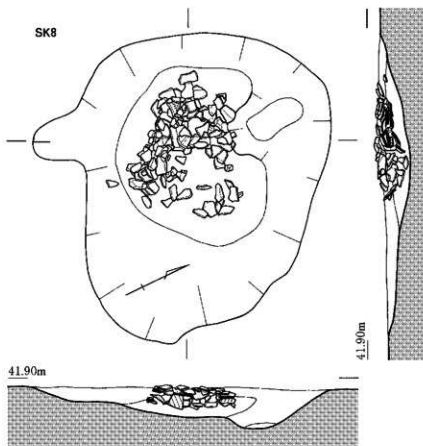


0 (1/20) 1m

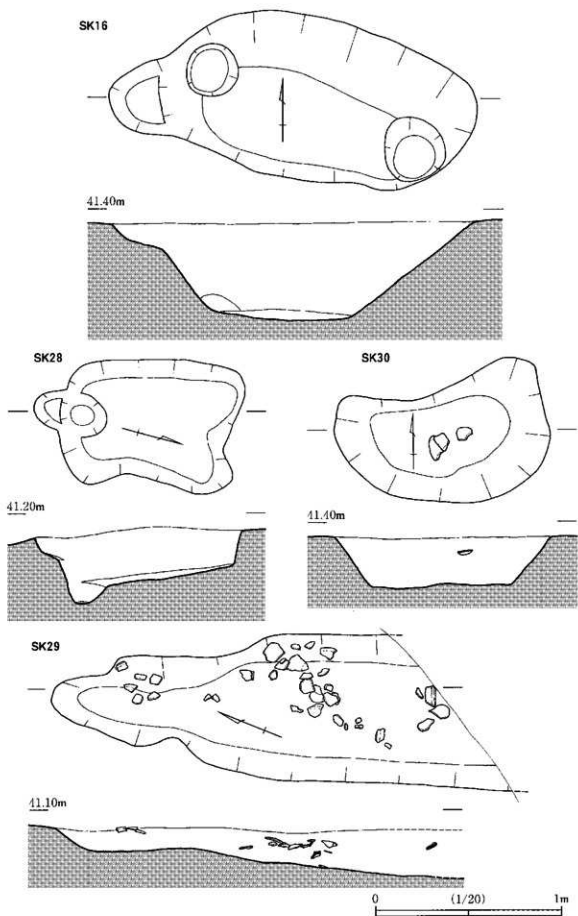
第13図 土坑実測図③

SK 9 (第14図、図版6・7)

A地区中央東側に位置する不整形に掘り込まれた土坑である。3個所に見られる柱穴は後世の掘り込みであると思われる。規模は長軸231cm、短軸175cm、深さ22cm。後世の削平を受けている。弥生時代前期の壺(43)、甕(44)、挟人柱状片刃石斧(126)、円石(131)など、生活に関わった遺物がまとめて出土した。層土は黒褐色粘質土の単一層。出土遺物からSK 8と同様に弥生時代前期末の廃棄土坑であると考えられる。



第14図 土坑実測図④



第15图 土坑实测图⑤

SK16 (第15図、図版7)

A地区の中央南寄りに位置し、長円形に深く掘り込まれた土坑である。規模は長軸198cm、短軸97cm、深さ52cm。出土物は、弥生土器の竈、甕である。底部の地山が黄褐色、良質の粘質土であることから土器製作に用いられた粘土採掘坑であった可能性が指摘できる。

SK28 (第15図、図版7)

A地区南部に位置する不整形の土坑である。規模は長軸114cm、短軸74cm、深さ41cm。弥生土器の甕(49)、甕(47・48)が出土した。埋土は黒褐色粘質土の単一層。時期は弥生時代中期中頃と比定される。

SK29 (第15図、図版7)

A地区の南部に位置し、南端部は調査区外にかかる。平面形は長円形。規模は長軸250cm(残)、短軸83cm、深さ25cm。弥生土器の甕(50~52)、甕(53~55)など多数出土した。埋土は黒褐色粘質土の単一層。弥生時代中期後半の廃棄土坑と考えられる。

SK30 (第15図、図版7)

平面形は長円形。規模は長軸116cm、短軸78cm、深さ28cm。弥生土器の甕(46)、甕(45)が出土した。埋土は黒褐色粘質土の単一層。時期は弥生時代中期後半と考えられる。

第2表 土坑一覧表

地区	道橋番号	平面形	規模(cm)			出土遺物	時代	
			長軸	短軸	深さ			
1	A	SK1	310	270	47	弥生土器(甕、甕、甕)	弥生前期後半	
2	A	SK2	250	110	24	弥生土器(甕、甕)	弥生前期後半	
3	A	SK3	232	208	25	弥生土器(甕、甕)	弥生前期後半	
4	A	SK4	115	76	11	弥生土器(甕、甕)	弥生	
5	A	SK5	144	130	20	弥生土器(甕、甕)	弥生	
6	A	SK6	353	118	33	弥生土器(甕)	石施丁 弥生中期	
7	A	SK7	310	145	26	弥生土器(甕、甕)	大瀬給刃石斧 狭人柱状片刃石斧	弥生前期末
8	A	SK8	165	156	20	弥生土器(甕、甕)	凹石	弥生前期末
9	A	SK9	231	175	22	弥生土器(甕、甕)	狭人柱状片刃石斧 凹石	弥生前期末
10	A	SK10	65	58	18	弥生土器	弥生	
11	A	SK11	78	53	27	弥生土器(甕、甕)	石鏡 土師器	中世
12	A	SK13	95	70	35	弥生土器(甕、甕)	土師器	弥生
13	A	SK15	95	86	37	弥生土器(甕、甕)	土師器	弥生
14	A	SK16	198	97	52	弥生土器(甕、甕)	凹石	弥生
15	A	SK17	90	75	36	弥生土器(甕、甕)	凹石	弥生
16	A	SK18	123	118	46	弥生土器(甕、甕)	弥生	
17	A	SK19	82	44	31	弥生土器(甕、甕)	弥生	
18	A	SK21	150	66	36	弥生土器(甕、甕)	土師器	中世
19	A	SK22	105	97	26	弥生土器(甕、甕)	弥生	
20	A	SK23	180	54	35	弥生土器(甕、甕)	土師器	中世
21	A	SK24	90	55	40	弥生土器(甕、甕)	弥生	
22	A	SK25	132	67	31	弥生土器(甕、甕)	弥生	
23	A	SK26	148	95	26	弥生土器(甕、甕)	弥生	
24	A	SK27	100	50	25	弥生土器(甕、甕)	土師器	中世
25	A	SK28	114	74	41	弥生土器(甕、甕)	弥生	
26	A	SK29	303	83	23	弥生土器(甕、甕)	弥生	
27	A	SK30	116	78	28	弥生土器(甕、甕)	弥生	
28	A	SK31	82	58	37	弥生土器(甕、甕)	弥生	
29	A	SK32	185	95	36	弥生土器(甕、甕)	弥生	
30	A	SK33	100	70	41	弥生土器	弥生	
31	A	SK34	113	66	44	弥生土器	弥生	
32	A	SK37	84	77	47	なし	不明	
33	A	SK38	196	52	30	なし	不明	
34	A	SK39	85	65	28	弥生土器(甕、甕)	弥生前期末	
35	A	SK41	200	115	22	なし	不明	
36	A	SK42	120	56	18	弥生土器 土師器	中世	
37	A	SK43	154	78	20	なし	不明	
38	A	SK44	116	64	14	弥生土器(甕、甕)	弥生前期	
39	A	SK45	156	68	43	弥生土器(甕、甕)	弥生	
40	A	SK46	90	70	30	なし	不明	

4 溝状遺構 (第16・17図、図版8)

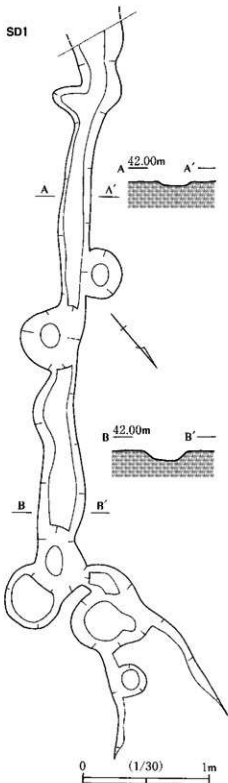
調査区内から5条の溝状遺構を検出した。A地区から4条、B地区から1条である。形状や規模は様々ではなく、用途は違ったものであると思われるが、掘立柱建物や土坑との切り合い関係や山上遺物(弥生土器)などから考えて弥生時代のものがほとんどであると思われる。また、SD2を除いてどれも浅く、両端がたち消えることから、後世の水山開発で大きく削平をうけたものとする。以下、主要なものをとりあげる。

SD1 (第16図、図版8)

A地区の北部に位置する。南端を後世の暗渠水路で切られ、北端をSK2で切られる。残存する直線部分は約4.5m。底面の標高差は6cmで、南西方向から、途中屈曲し、北へ向かって流れていたものとする。主軸方向はN50°Eである。幅は20~70cm、深さは4~10cmと、削平を受け、浅い。屈曲部は澁みがあったのか、弥生土器片の出土が見られた。SB10の柱穴に切られていることから時期は弥生時代前期末の可能性が高いと考えられる。

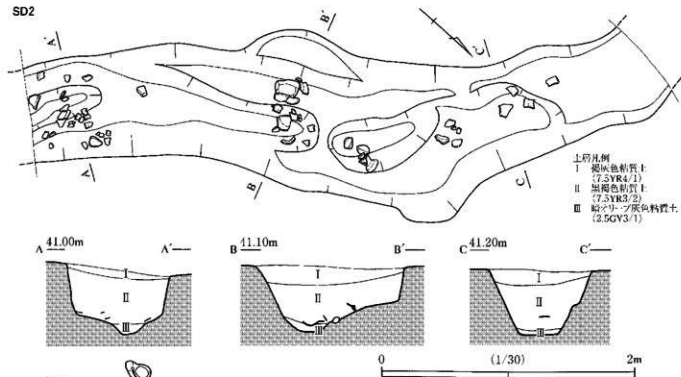
SD2 (第17図、図版8)

A地区の下段南端部に東西に延びて位置し、両端は調査区外にかかる。残存する長さは、約5.2m、幅は75~120cm、標高差は60cm。西から東に向かって流れていたものと考えられる。埋土は、大きく3層の堆積がみられる。底部は、若下の凹みはあるが、概してV字状の断面を呈す。他の溝状遺構に比べて規模が大きく、遺物の出土量も圧倒的に多い。遺物の時期差も大きく、長い間溝として使用されたものと思われる。現在の谷筋に沿っていることから、自然の流路であった可能性もあるが、埋土の堆積状況や、集落の縁辺部に位置していることから、集落を区画するため、意図的に掘り込まれた溝の可能性が強いとみられる。出土遺物は、弥生土器の壺(56~62)、甕(63~67)、高杯(68~71)など、弥生時代前期末~中期後半にわたる。また、石彫丁(122)、太型蛤刃石斧(129)などの石器の出土もみられた。溝としての機能を果たした主たる時期は弥生時代中期中頃から後半にかけての頃であると推定されよう。なお、溝のかなり上部から須恵器の甗(72)が1点出土したが、須恵器の出土はこれのみであり、重複した当該期の遺構に伴ったものである可能性が強いとみられる。欄列や土塁等の痕跡は検出されなかった。



第16図 溝状遺構実測図①

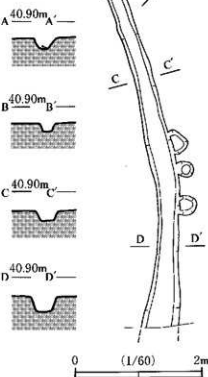
SD2



SD4

SD4 (第17図、図版8)

B地区の西に、弧を描くように1条の溝が南北に延び、それと直交するようにもう1条の溝が東西に延びて位置する。北端、東西端は調査区外にかかる。残存する長さは、南北に約6m、東西に約7m、幅は30~40cm。深さは20~30cm。底部の標高差は30cmである。南端部は、崩平を受けたのであろう、たち消えている。規模、形状からみて、住居に伴う屋外排水溝であった可能性が高い。確認はされていないが、調査区外の西に竪穴住居が位置していたものと推定される。そのため、周囲に溝を巡らせ、東に向けて溝を掘り込み、屋内外の排水を行ったものと思われる。出土遺物は弥生土器の甕(73)、磨製石剣(124)がある。埋土は、黒褐色粘質土の単一層からなる。時期は、弥生時代中期のものとは比定される。



第17図 溝状遺構実測図②

4 柱穴 (第18図、図版9)

今回の調査では、調査区の広い範囲で掘立柱遺物を構成するものも含んだ、約500個の柱穴が検出された。特に密集していたのはA地区の中央部分である。検出された柱穴のうち、3分の1程度から遺物が出土した。以下、代表的なものを取り上げる。

SP101 (第18図)

A地区下段、中央部に位置する。規模は直径26cm、深さ53cm。弥生土器の甕(77)が出土した。弥生時代中期のものと考えられる。

SP177 (第18図、図版9)

A地区中央部に位置する。規模は直径23cm、深さ11cm。弥生土器のミニチュア甕(75)が完形で出土した。腐絶儀礼に伴う遺物である可能性も考えられる。時期は弥生代前期～中期のものと考えられる。

SP178 (第18図)

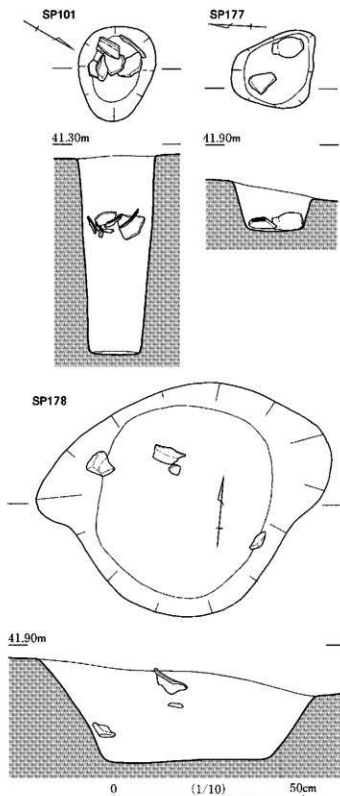
A地区北東部に位置し、SB2の南西隅柱を構成する。規模は直径80cm、深さ26cm。弥生土器の甕(7・8)が出土した。時期は弥生代前期末～中期初頭と考えられる。

5 不明遺構 (第19図、図版9)

今回の調査では、形状、出土遺物などから用途を特定することのできない遺構が2基検出された。特に、ここで紹介するSX3は、規模、出土遺物ともに本遺跡最大の遺構である。

SX3 (第19図、図版9)

A地区の北東部に位置し、北端部は調査区外に広がる。平面形は不整形。規模は長軸9m以上、短軸4.5m、深さ10cmの広いが、きわめて浅い遺構である。規模、出土遺物の量ともに、この遺跡最大の遺構である。出土遺物は弥生土器の甕(78～86・94・97)、甕(87～93・95・96・98)、石庵丁(123)、凹石(134)など多数である。小型の堅穴住居や重積した土坑の可能性もあるが、確認し得なかった。出土遺物から、弥生時代中期のものと考えられる。



第18図 柱穴遺物出土状況実測図

SX3



第19圖 不明遺構 (SX3) 実測図

IV 遺物

調査の結果、弥生時代前期～中期を主体とする時期の遺物が多数出土した。また、古墳時代や中世の遺物も遺構検出面や表層採集などから少数ではあるが、出土が確認された。主な遺物の種類としては、弥生土器が圧倒的に多く、須恵器・土師器・瓦質土器・陶磁器、土製品・石器などがある。弥生土器は摩滅が激しく、調整の不明瞭なものが多い。以下、遺構ごとに主な遺物についてとりあげる。なお、弥生土器の時期については、弥生時代を省略して記すこととする。

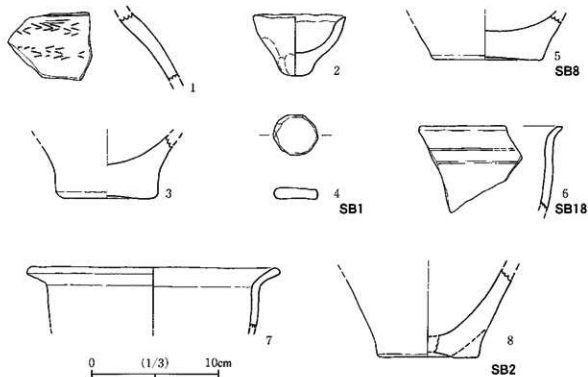
1 住居・建物出土遺物（第20図、図版10）

SB1 出土遺物（第20図1～4） 1は壺の肩部である。貝殻による羽状文が施され、上部にヘラによる沈線が巡る。2は手握ねのミニチュアの鉢で、底部は厚手、外面下部には指頭圧痕が明瞭である。祭祀に用いられたものと考えられる。3はやや上げ底の甕の底部。4は土製の円盤である。いずれも前期末に比定される。

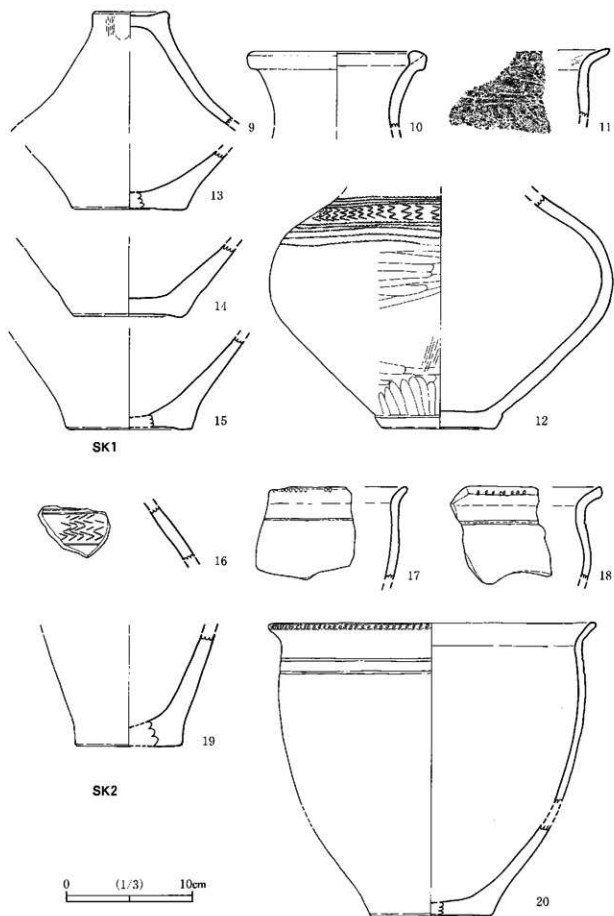
SB2・8・18出土遺物（第20図5～8） 5は前期末と思われる甕の底部。6は前期後半の甕の口縁部で、緩やかに外反し、口縁下部に2条の沈線を施す。7は甕の口縁部。胴部から加曲して口縁が外反し、ナデ調整が施される。8は甕の底部。やや上げ底で、底端部に接合痕が認められる。7、8はSB2出土。前期末～中期初頭のものである。

2 土坑出土遺物（第21～24、図版10～15）

SK1 出土遺物（第21図9～15） 9は蓋である。端部が欠損しているが、甕の蓋として利用されたものと思われる。上部には指頭圧痕が残り、外面にヘラミガキ調整を認める。10は壺の口縁部。緩やか



第20図 住居・建物出土遺物実測図



第21图 土坑出土器物实测图①

に外反し、口唇部は肥厚帯を貼付して内折する。11は壺の口縁部。外面には貝殻による沈線が3条巡る。12は口頸部が欠損しているが比較的残りの良い壺である。外面はヘラミガキの調整。肩部には貝殻による沈線に挟まれるように羽状文が巡る。灰白色の色調を呈し、底径8.8cm、胴部最大径は復元で25.2cmを測る。胎土は粗く、砂粒が多い。13～15は壺の底部。14、15はやや上げ底である。10がやや新しい様相を呈すが、前期末の上器群とみてよいだろう。

SK 2 出土遺物 (第21図16～20) 16は壺の肩部である。上下に沈線を配し、間にヘラ描きによる羽状文が刻まれる。17～20は壺である。17、18は口縁部のみ。どちらも口縁下部に1条の沈線を巡らし、外面に刻目を施す。20は口縁下部に2条の沈線、口唇部に刻目を巡らす。色調はにぶい黄橙色を呈し、復元口径25.4cm、器高23cm、底径9.4cmを測る。胎土は粗く、砂粒を多く含む。17、18が前期後半、他は前期末のものである。

SK 7 出土遺物 (第22図21～24) 21は壺の肩部。外面はヘラミガキ調整。重弧文の上部に鋸歯文が巡る。いずれも貝殻施文である。22は、壺の底部。23、24は壺の底部、やや上げ底。23は、底部上面に貼り付け痕を認める。24は外面にハケメが残り、底部はかなり厚めである。いずれも前期末に属するものである。

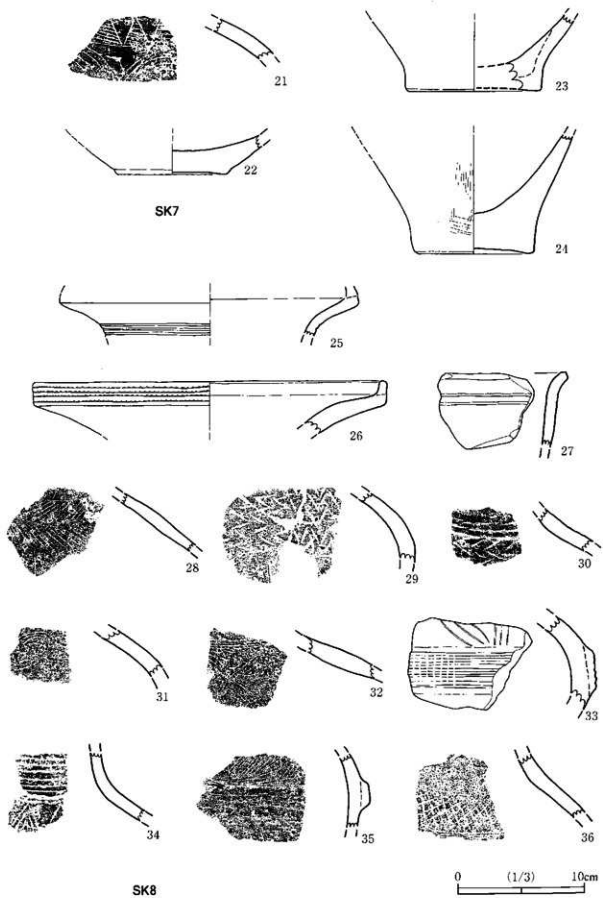
SK 8 出土遺物 (第22図25～36) 27の壺を除いて、いずれも壺である。27は2条の沈線を施す壺の口縁部である。25、26は、口縁端を立ち上げて口唇帯を形成する。25は頸部にかけて最低3条の沈線が見られ、26は、口唇帯に貝殻で4条の沈線を刻む。口縁の推定径は27.4cmを測り、かなり大型の壺である。28～36は頸部から肩部、胴部にかけて文様を施したものである。28は貝殻による有軸羽状文、その下に山形文を施文。29は、縦横にヘラ描き羽状文。30はヘラ描き羽状文の上部に3条の沈線を巡らす。31～33は木葉文の施文が見られる。32は貝殻による。33は胴部に5条の沈線を刻んだ貼り付け突帯を有する。34は頸部に沈線を巡らし、肩部に山形文の貝殻施文が見られる。35は胴部の貼り付け突帯上部に羽状文を貝殻で施文。36は、肩部にヘラで斜格子文を施文したものである。いずれも前期末のものである。

SK 3・5・6・32・34・44 出土遺物 (第23図37～42) 37は前期中頃～後半頃の小型の壺である。内外面ともにヘラによる調整が見られ、外面下部には縦方向のミガキ痕も認められる。口縁と頸部及び、頸部と肩部との境に段を形成する。ハケ原体の押しによると思われる。色調は灰白色を呈し、復元口径9.8cm、底径6.0cm、器高12.6cmを測る。胎土は粗く、砂粒を多く含む。38は前期末～中期初頭の壺。底部は小さく、胴部が大きく張り出す。39、40は前期末～中期前半の壺の口縁部。39の外面はハケ、口縁部はハケ後ナゲ調整。41、42は前期末の壺の肩部。41はヘラ描きの鋸歯文の下に羽状文が施文されている。42は貝殻の羽状文の下にヘラ描きの重弧文が巡る。

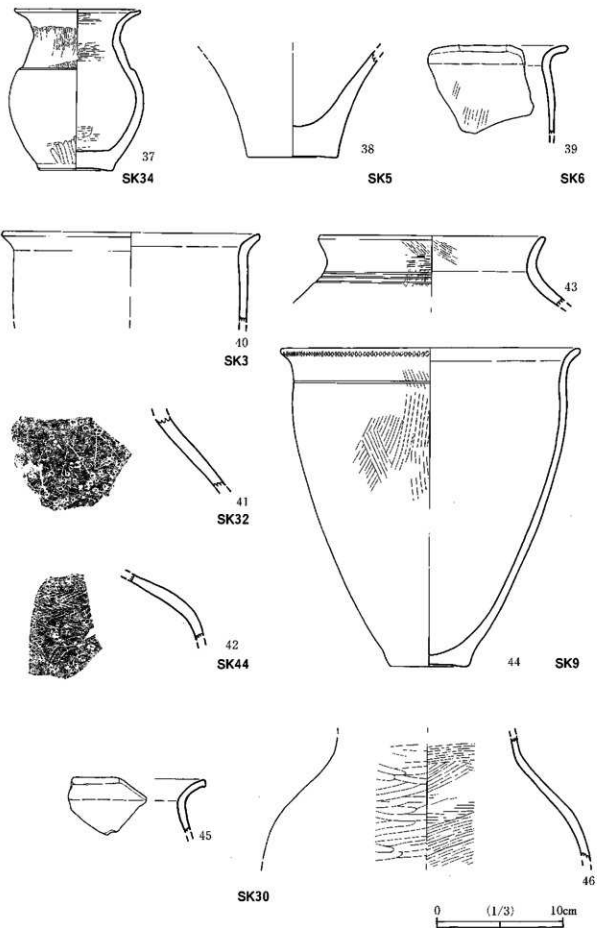
SK 9 出土遺物 (第23図43～44) 43は前期末の短頸壺。頸部に3条の沈線が巡る。内外面ハケ調整。44は前期後半の壺。口縁は緩やかに外反し、1条の沈線を巡らせる。口唇部には刻目を施す。外面はハケ調整。復元口径23.4cm、底径6.2cm、器高25.0cm。色調は浅黄橙色を呈す。

SK 30 出土遺物 (第23図45～46) 45は中期の壺。46は、前期の壺である。内外面ともにハケ調整が見られ、外面は更にヘラミガキが施される。

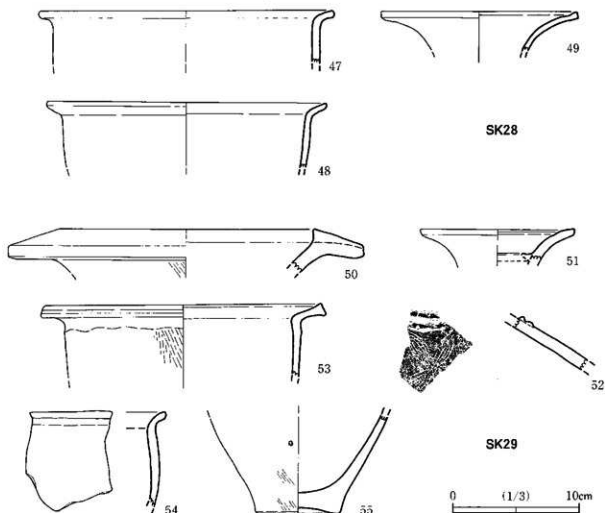
SK 28 出土遺物 (第24図47～49) 47、48は中期初頭頃の壺である。口縁部は稜をたてて外反する。49



第22图 上坑出土遗物实测图②



第23图 土坑出土遗物实测图③



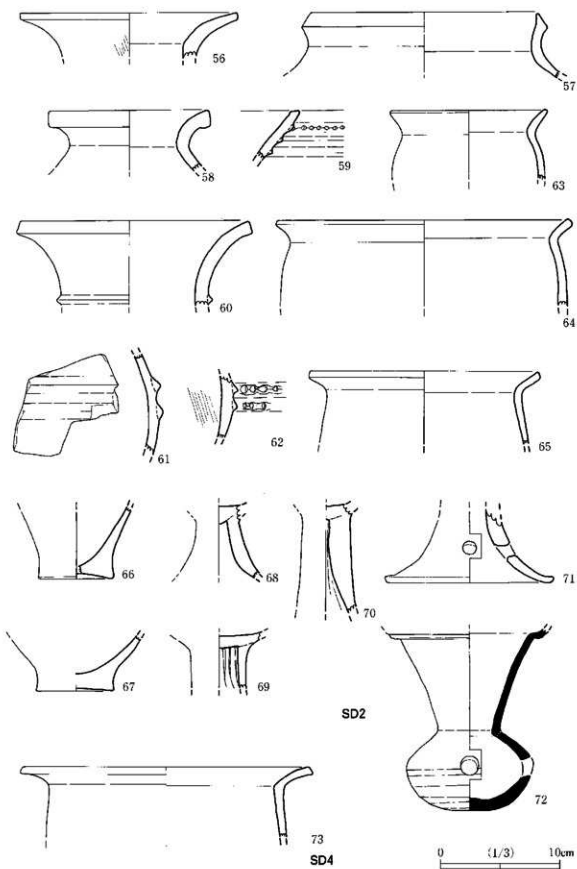
第24図 土坑出土遺物実測図④

は中期中頃～後半の小型の壺である。口縁部は大きく緩やかに外反し、先端を揃み上げる。

S K 29出土遺物(第24図50～55) 50は中期中頃～後半の大型壺である。口縁部が若干垂下し、肥厚帯を貼付して鋤先状を呈する。51は口頸内部に三角の突帯を貼付する、前期末～中期初頃の小型の壺である。口縁部はやや段状に肥厚する。52は、前期末の壺の肩部である。三角の突帯が2条貼り付けられ、貝殻木葉文が巡る。53～55は中期中頃の壺。53は口縁部が鋭く外反し、ナデによる仕上げが施される。55は外面に焼成後の穿孔が見られるが、貫通はしていない。外面にハケ調整を認め、やや上げ底である。

3 溝状遺構出土遺物(第25図、図版16)

S D 2 出土遺物(第25図56～72) 56～62は中期初頃～中期中頃の壺である。56は口縁が大きく外反し、口頸部はナデによって端面が形成される。57は短頸壺の口縁部である。口頸部は上方に尖るようにナデ仕上げされる。58は短く外反し、口頸部を外側に肥厚させる。59は口縁端部に面を持ち、外面に貼り付けの三角突帯を形成し、刻目を施す。60は口唇部に端面が形成され、頸部には、三角突帯を貼り付ける。61、62は壺の胴部。どちらも貼り付けの三角突帯を2条有する。62は頂部に刻目を施す。63～65は中期前半頃の壺である。いずれも口縁が稜を立てて外反する66、67は中期の壺の底部である。やや上げ底。68～71は中期後半頃の髙杯の脚部である。68～70は杯部との接合痕が確認できる。また



第25图 沟状遗槽出土物实测图

脚部内面には整形時のシボリ痕が認められる。71は脚底部。底部はラッパ状に広がり、稜角付き。直径1cmの穿孔を施す。72は古墳時代の須恵器の甕。口縁部は欠損しているが、残存状態は良好である。底部は回転ヘラ削り、他は回転ナデ仕上げ。胴部中央に直径1.6cmの返し孔を施す。口頭部と胴部の境に接合痕が認められる。胴径は10.6cmを測り、色調は青灰色を呈す。

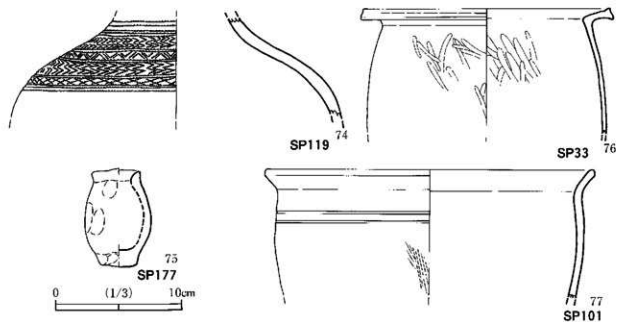
SD 4 出土遺物 (第25図73) 中期の甕の口縁部。口縁は鋭く外反し、口唇部をナデ調整によりやや肥厚させる。

4 柱穴出土遺物 (第26図、図版17)

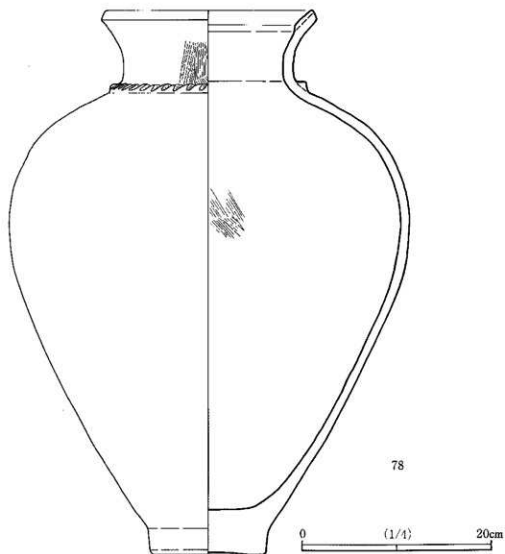
74は、SP119から出土した前期末の壺である。肩部に山形文を挟み羽状文が配され、下には斜格字文が施文される。更に施文の間、上下に沈線が巡る。施文はいずれも貝殻による。75はSP177出土のミニチュア壺である。手捏ねにより、指頭圧痕が残る。焼絶儀礼に用いられた可能性がある。76はSP33出土から出土した中期中頃の甕である。口縁部は稜を立てて外反し、ナデによる肥厚が見られる。内外面に磨き痕が残る。77はSP101出土の前期末の甕である。口縁下部に2条の沈線を施し、胴部がやや張り出しを見せる。

5 不明遺構 (SX3) 出土遺物 (第27・28図、図版17・18)

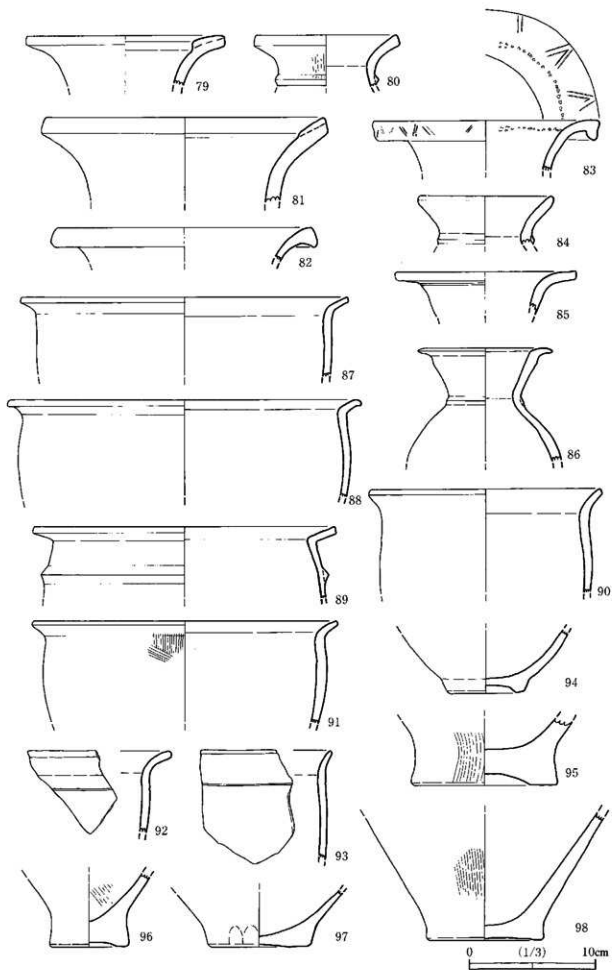
78は中期中頃の大型の壺である。口縁は短く外湾し、口唇部に肥厚帯をもつ。頸部と胴部の境には三角突帯を貼り付け、頂部にハケ日施文部押圧による刻目を施す。内外面ともに、ハケによる調整が見られる。復元された口径は21.8cm、器高57.5cm、底径11.6cm、最大胴径は42.4cmを測る。色調は灰白色を呈し、胎土は粗く、砂粒を多く含む。79～86は前期末～中期前半に見られる壺の口縁部である。79は口縁が大きく外反し、内部に肥厚帯を有する。80は小型の壺とみられ、口縁は外反し、頸部に三角突帯を巡らす。外面にたて方向のハケ調整を認める。81は口縁内部に肥厚帯を有する大型の壺と思われる。復元口径は21.8cmを測る。82、83は口唇部が肥厚し、垂下する。82は大型の壺とみられ、復元口径は20.0cmを測る。78と同型の壺ではないかと推定される。83は口唇部外面と、口縁内部に文様を施す。口唇部には山形文を配し、内部には外側に山形文、内側に刺突文を施す。84～86は中期前半代の小型の壺と思われる。84は口縁が短く外反し、頸部に三角突帯を貼付する。85は口縁が大きく外反し、折れ曲がる。外面上部には1条の沈線を施す。86は頸部に三角突帯を貼付した小型の壺である。口縁は外に向かって直線的に立ち上がり、口唇部を外に折り曲げ、尖らせている。87～93は前期後半～中期前半の甕の口縁部である。87は口縁が緩やかに外反する。88は口縁が稜を立てて外反する。89は口縁が鋭く屈曲して外反し、口縁下部に三角突帯を貼り付ける。90、91は口縁が緩やかに外反する。91は外面にハケ調整を認める。92、93はどちらも外面に1条の沈線を巡らす。93はほぼ垂直に口縁が立ち上がる。94、97は中期の壺の底部とみられ、94は上げ底。97は指頭圧痕が外面に残る。いずれも底部は薄い。95、96、98は中期の甕の底部と思われる。95、96は上げ底となっており、95は外面に、96は内面にハケ調整を認める。98は胴部が直線的に立ち上がるとみられ、外面に縦方向のハケ調整が認められる。



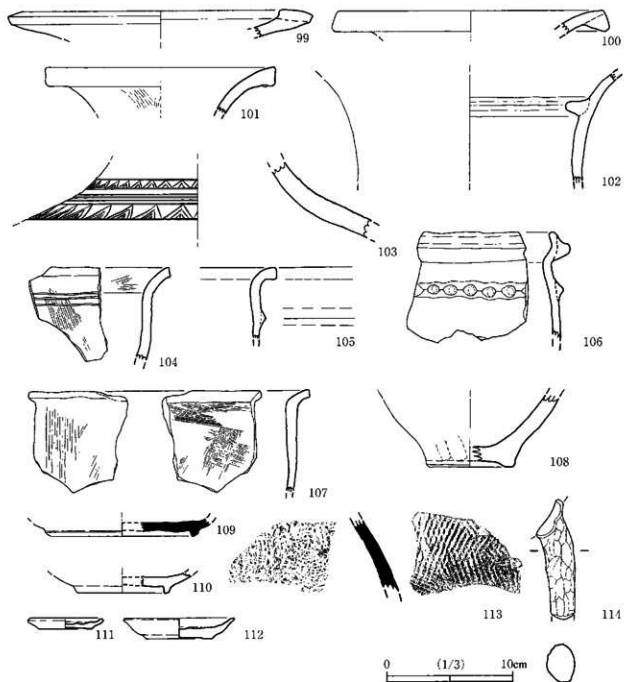
第26图 柱穴出土遺物実測図



第27图 不明遺構 (S X 3) 出土遺物実測図①



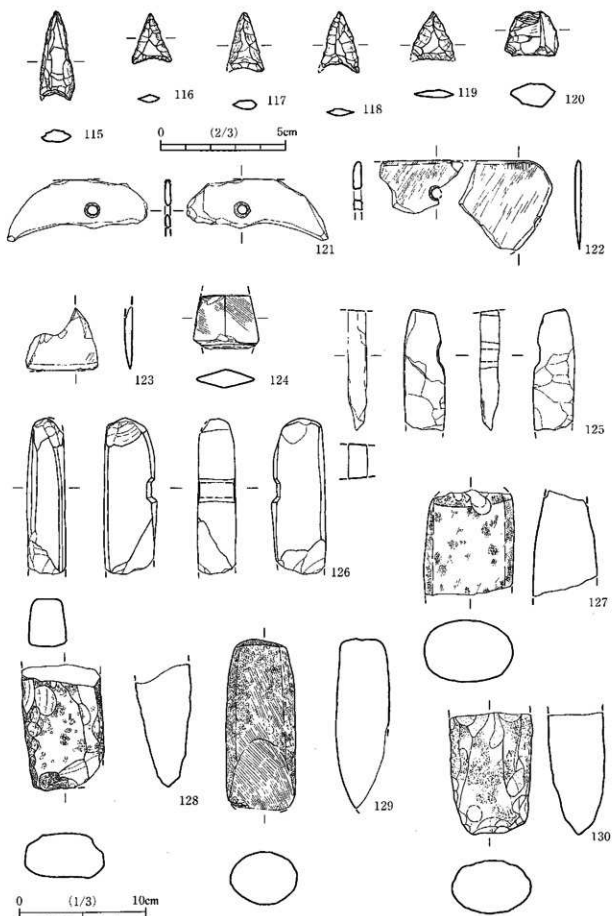
第28图 不明遺構 (SX3) 出土遺物実測図②



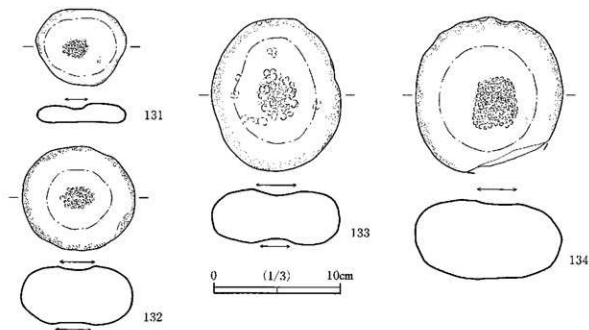
第29図 表面採集遺物実測図

5 表面採集遺物 (第29図、図版19)

99は前期末と考えられる壺の口縁部で、上部に肥厚帯が貼付される。100は中期前半とみられる壺の口縁部で、下部に三角の肥厚帯を貼付し、口縁部を垂下させている。貼り付けの際ついたと思われる指痕が残り。101は中期前半とみられる壺の口縁部である。口縁は大きく外反し、やや垂下する。外面にはハケによる調整が認められる。102は前期末と思われる大型壺の口縁で、大きく外反し、先端が欠損している。内面には突帯の貼付が施され、ナデによる調整が行われている。103は前期末とみられる壺の肩部である。2段にわたって山形文を配し、その間に3条の沈線を刻む。更には文様の上下にも沈線を走らせる。下段の文様が大きく3重の山形が描かれている。ヘラ描きによる。104-107は壺の口縁部である。104は前期末とみられ、口縁は緩やかに外反し、外面に3条の沈線を巡らす。内外面にハケ調整を認める。105は中期前半とみられ、先端部を水平に折れ曲げる。外面に三角突帯



第30图 石器实测图①



第31図 石器実測図②

を貼付する。106は中期前半とみられ、口縁外面に肥厚帯を貼付し、口唇部が内傾する。口縁下部に三角突帯を貼付し、頂部に指頭押圧による刻目を入れる。107は中期に下ると思われ、内外面にハケ調整を認める。108は中期の壺の底部とみられる。やや上げ底で、外面に指頭圧痕が見られる。109は8世紀前半代とみられる須恵器の高台付杯である。内面は回転ナデ、底部は回転ヘラ切り後、貼り付け高台。110は12世紀代頃とみられる土師器の甗である。内外面、回転ナデ調整を施し、回転糸切り後、貼り付け高台。111、112は土師器の皿である。どちらも回転ナデ調整を施し、112の底部は回転糸切りと見られる。113は須恵器の甗である。内面に当て木による青海波文、外面に叩き板による平行叩き目文が残る。114は15～16世紀の瓦質土器、足箱の足部分である。外面に指頭圧痕が見られ、後にナデ調整を行ったものと思われる。

6 石器 (第30・31図、図版20)

115～119は打製石鏃である。119は平基無茎式、その他は凹基無茎式である。石材は115が泥質片岩の他は安山岩である。120は楔形石器で、石材はチャートである。121～123は石庖丁である。いずれも泥岩製である。121は背の部分がわずかに残り、刃の部分は欠損している。両面穿孔が見られる。122は大型の石庖丁とみられ、両面擦痕が残る。これも穿孔が残る。123は刃の部分が残るが、穿孔部で欠損したと思われる。124は泥岩製の有柄式磨製石剣である。切っ先及び基部が欠損しているが、欠損部に研磨痕を認めることから再利用した可能性がある。125、126は泥岩製の挟入柱状片刃石斧である。125は両面及び刃部の欠損が甚だしく、126は刃部が欠損している。どちらも挟部が浅い造りとなっている。127～130は大型始刃石斧である。129はほぼ完形である。全体的に研磨されているが所々に敲打痕が残る。石材は127が砂岩、128、130は泥岩、129は凝灰岩である。131～134は凹石である。石材は131が砂岩、132が花崗岩、133は安山岩、134が花崗斑岩である。

V まとめ

1 調査成果の概要

今回の発掘調査により、矢山遺跡は弥生時代前期末～中期を中心とした時期、そして中世（鎌倉～室町）を通して営まれた集落跡であることが確認された。主な遺構は、竪穴住居2軒、掘立柱建物15棟、土坑40基、溝状遺構5条、柱穴約500個、不明遺構が2基である（第3図参照）。主な遺物は、前期末～中期を中心とした弥生土器の壺や甕が大半を占め、古墳時代の須恵器、中世の土師器が少数ある他、石鏃、石斧などの石器類である。以下、各時代の遺構・遺物などの特徴をもとに集落の性格についてまとめておきたい。

2 弥生時代

(1) 遺構について

集落の性格を表す主な遺構が住居等の建物である。ここでは2軒の竪穴住居が検出された。前述した通り、いずれも調査区外にかかるため、詳しく全容をとらえることはできない。この2軒は時期、形態を異にする住居である。一方（S B 1）は直径が7mを越える中規模な不整形円形を呈する住居である。床面積は推定で38.5㎡。出土遺物から弥生時代前期末に比定される。主柱穴は5ないし6本と考えられ、壁溝とみられる溝が周囲を巡る。壁は削平を受けたものと考えられる。また内側に更に浅い溝が検出されている。両端が立ち消えているため判断が難しいが、屋内の排水路、あるいは住居を拡張する以前の壁溝である可能性も指摘できる。中央には2段に土坑が掘り込まれている。埋土には炭化物が混じていたが、壁面は焼成を受けていないため、炉であったとは考えにくい。したがって、炊事は屋外で行われたと考えるのが妥当であろう。この土坑は、出土遺物にミニチュア土器の鉢があることから、祭祀に用いられた可能性⁽¹⁾も考えられる。このように中央ピットをもつ住居は、近隣の遺跡にも類例を見る。時期はやや下るが下七見遺跡⁽²⁾、上原遺跡⁽³⁾がそれである。前期末の住居は、この1軒のみの確認に留まるが、調査面積、西部の削平を考慮すると、この時期、それ以上の住居が存在したと推定できる。また、県内では前期末の住居は確認された例が少なく、貴重な資料である。

もう1軒の住居（S B 9）も調査区外にかかることから、全容は明らかではないが、県内では後期以降に主流となる平面形が隅丸方形を呈する竪穴住居であると考えられる。出土遺物から中期と推定される。また、一段下がったB地区に、中期の溝状遺構が検出されている。これは形状から判断して、住居に伴った溝である可能性が高く、調査区外にも同じように中期の住居が存在したと推定できる。更に、中期の遺構であるS X 3が小型方形住居の床面であるとなると、少なくとも3棟以上の住居を推定することができる。したがって、この遺跡では、前期末、中期にわたり、住居形態を異にしながら、竪穴住居数軒を単位とした集落が営まれていたと言える。

次に、この遺跡では15棟の掘立柱建物⁽⁴⁾が検出されている。そのうち弥生時代と比定されるものは4棟である。このうちS B 2は出土遺物から弥生前期末と考えられる。他の3棟については時期を確定できないが、後期の遺物を見ないことから中期までの建物と推定される。平面形はいずれも小型の長方形を呈すること、また、東に隣接して低湿地が広がることから、これらの建物は高床倉庫であると考えられる。S B 2は時期から考えてS B 1に伴うものと思われるが、他の3棟は前期末、中期いず

れかの住居に伴うものであろう。調査範囲が狭く、推定の域を出ないが、低湿地に面し、湧水層が地表面に迫るといった条件が、早い段階から、穀物等の貯蔵形態を従来の貯蔵穴から高床倉庫へと変換させていったと考えることもできる。あるいは、初めからこうした技術・知識を持った人々が集落を営んだとも考えられるであろう。

土坑の検出総数は40基、そのうち弥生時代の土坑は29基を数える。平面形は円形、長円形、不整形など一定ではないが、いずれも深さは60cmに満たず、20～30cmと浅いものが大半を占める(第2表参照)。上部の削平を受けたとしても浅めである。また、出土した土器も破片がほとんどであり、完形を見ない。弥生前期から中期に見られる土坑は綾羅木郷遺跡⁽¹⁾に代表されるように、袋状土坑が一般的である。袋状土坑は貯蔵を目的とした機能が考えられている。これら、袋状土坑は主として響灘沿岸や瀬戸内海沿岸の平野部に隣接する台地や丘陵上に分布する遺跡に見られる。近隣では上原遺跡にこれを認める。しかし、下七見遺跡⁽²⁾、中村遺跡⁽³⁾、突抜遺跡⁽⁴⁾、惣の尻遺跡⁽⁵⁾など内陸盆地の低位に営まれた集落には、矢田遺跡⁽⁶⁾で見られるような浅いⅢ上の土坑が多く検出されている。これらは上に覆層をつけて貯蔵穴として利用したと考えられている。低位に立地する集落では、地表近くに湧水層が迫り、深い土坑を掘り込めなかったという地理的条件があったものと考ええる。しかし、高床倉庫にみられるように、貯蔵方法のいち早い転換が行われたり、住居区と貯蔵施設区を分けていたりしたと考えられ、これらの土坑は貯蔵穴としての機能よりも、廃棄土坑としての役割を担った可能性が高い。出土遺物の破損状況からもこの可能性は指摘できる。

調査区の南端には幅1mを越える溝が位置している。前期末～中期後半にわたる遺物が多数出土していることから、住居の存在した時期と一致する。埋土の堆積状況からみても人為的に掘り込まれたものと推定される。この集落が低湿地に面した東端部の張り出し部分に位置することから、集落と低湿地とを区画した溝ではないかと考えられる。欄列や土塁等の痕跡は検出されず、規模的にも防衛的性格は指摘し得ない。

(2) 土器について

この遺跡では、前期末～中期を主体とした弥生土器が多数出土した。出土した土器は、前期末の大半が十坑群からの出土である。中期は主として溝状遺構(SD2)、不明遺構(SX3)からの出土である。後期に下る土器はいずれからも確認されず、主要な時期は前期末～中期に位置づけられる。出土した土器は、響灘沿岸の影響を色濃く映すものであり、前期末の土器は綾羅木Ⅲ式に属するものである。器形の全容がうかがえる資料は乏しいが、この土器に特徴的な羽状文、木葉文、垂弧文などが貝殻、ヘラによって施文された肩部、突帯を貼り付けた胴部の土器片や、口縁内部に突帯を貼り付けたものなどがある。また、口縁部が朝顔状に広がり、端部を立ち上げて、垂直または内傾させて口唇帯を形成した壺(25、26)が出土した。この形態は下七見遺跡⁽²⁾、上原遺跡⁽⁷⁾、上東遺跡⁽⁸⁾、赤妻遺跡⁽⁹⁾などの内陸部に主に見ることができる。中期に入ると、北部九州系の壺や甕の他、瀬戸内の影響を受けたと思われる、垂下口縁を形成する壺(82、83)も見られるようになる。また、岡山遺跡⁽¹⁰⁾に見られる口縁端部に面を持ち、刻み口を持つ突帯を多数貼り付けた壺(59)も出土した。当初は、響灘沿岸の影響を大きく受けていたが、他地域との交流が活発になるうちに、東西の影響が入り交じるようになったと言える。内陸間交通が早くから開けていたのではないかと推定できる。

(3) 集落の形成について

遺構、遺物の特徴から、矢田遺跡の集落形成について考察を試みる。

綾羅木郷遺跡に代表されるように、現在の下関から、土井ヶ浜遺跡のある豊北町にかけて南北に延びる海岸帯には弥生時代の遺跡が点在する。大陸・朝鮮半島と対峙したこの地域は、新しい文化を受け入れるに適した地理的環境にあったと行える。しかし、これらの遺跡が立地する海岸部には、水稲耕作の基盤となるべき肥沃な平野があまりにも少ない。必然的に漁撈依存度が高くなり、集落の成熟に伴って増大する人口を支えるに十分な食料を供給することは困難であったと想像できる。このため、水稲耕作に適した広い低湿地を求め、分村していったと考えられる⁽¹¹⁾。

豊田盆地は木屋川の氾濫によって作り出された沖積性の谷底平野である。左岸には丘陵が広がり、弥生時代の環濠集落である七社遺跡が所在する。矢田遺跡は対岸に緩やかに広がる山麓に位置する。木屋川は洪水の度に流路を変え、氾濫を繰り返しては肥沃な低湿地をこれら遺跡の前面に造り出したのである。田部盆地と同様、この低湿地を求めて人々が移り住んできたことは想像に難くない。また、木屋川の氾濫を避けて、山麓や丘陵に集落を営んだのも妥当であろう。昭和47年の下水溝工事の際、地下1m40cmの所から多数の木製の杭と弥生土器片が発見されている。現在の町道が走る場所である。このことから、矢田遺跡の東には間近に低湿地が広がり、水田として利用していたと考えられる。杭は、土手や畦杭として利用されたのかも知れない。

低湿地よりやや高くなった現在の欠田地区に集落が形成されていたと考える。集落はSD2に見られるように、幅1m強の溝によって区画されていたと推定される。集落の形成された時期は前述の遺構、遺物から推察して弥生前期末～中期にかけて、不整形住居を持つものと、方形住居を持つものの、少なくとも2時期の集落が成立していたと推察される。収穫した穀物は竈などの土器に入れられ、高床倉庫に貯蔵されたものと思われる。今回の調査区は1,000㎡と狭く、遺跡の東端部に位置することから、集落の全容を決定することはできない。しかし、それでも、2軒の竈穴住居と4棟の掘立柱建物を確認し、多くの土器の出土を見たこと、そして、山麓の広がりには南北に更に延び、これまでも広い範囲にわたり弥生時代の遺物が出土していることなどから、この遺跡が大集落としての広がりをもつ可能性を指摘できるであろう。また、他の地域との交流も活発であったことは、内陸にありながら東西の土器文化を併せ持っていたことから明らかである。とりわけ、遺構や遺物の性格が類似し、木屋川の下流に位置する下七見遺跡、上原遺跡との関連は密接であったと想像される。こうして、成熟した弥生の集落も、後期にはその存続を確認できない。木屋川の氾濫が、集落同士の争いかは明らかでないが、なんらかの理由で移動したものであろう。その後、矢田の地が集落としての性格を見せるのは中世に下ってからである。

3 中世(鎌倉～室町)

今回の調査では、中世の遺構として、掘立柱建物が11棟、土坑6基、溝状遺構が1条検出された。遺構上面の削平のため、残存状況はいずれも良くない。中世の遺構として中心となるのが掘立柱建物である。出土遺物からは詳細な時期を決定できる遺物の出土が見られないため、棟方向で分類してみると、SB3・SB16、SB11・SB13・SB14・SB15・SB18、SB12・SB17の3群に大別される。棟方向の差が時期差を反映したものとすれば、少なくとも3期にわたる建物群と推定されよ

う(第1表参照)。これらの各群は、いずれも群内ではある程度の間隔を保っており、同時存在は可能である。だとすれば、2～4棟位で一単位が構成され、更に複数の単位で単一集落が構成されているものと推定されよう。なお、SB6、SB8は棟方向は同じであるが重なっているため近い時期に建て替えが行われたものと考えられる。これらの建物の規模はSB6、SB11が1間×1間、他もすべて2間×1間で、小、中規模なものである。規模からみれば一般的な農村集落を構成する建物群であったとみられる。詳細な時期が確定できない難点はあるものの、当地域における中世村落の実態をうかがう上で注目される資料と言えよう。なお、1992年度調査¹⁰⁾でも今回調査区の西上段部に掘立柱建物群を検出し、16世紀代の土師器が出土している。両者の位置関係からすれば、一連の集落であった可能性も考慮してよいであろう。

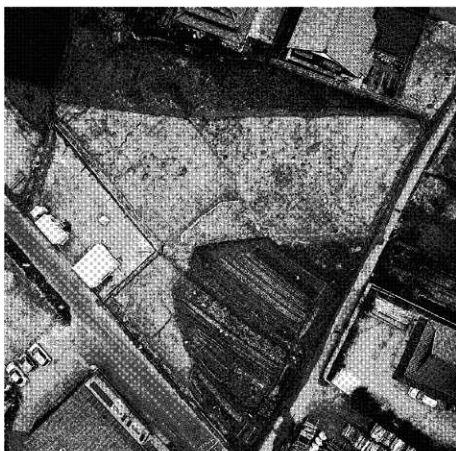
註)

- (1) 宮本長二郎「住居と倉庫」
(金岡勉/佐原真編集「弥生文化の研究第7巻 弥生集落」雄山閣1986年)
- (2) 菊川町教育委員会「下七見遺跡Ⅰ」1989年
- (3) 菊川町教育委員会「上原遺跡Ⅰ」1976年
- (4) 下関市教育委員会「渡尾小郷遺跡発掘調査報告第1集(本文巻)」1981年
- (5) 山口県教育委員会「中村遺跡」1987年
- (6) 山口県教育委員会「よみがえる弥生のムラ」1985年
- (7) 山口県教育委員会「坂手沖尻遺跡 惣の尻遺跡」1978年
- (8) 山口市教育委員会「上東遺跡 弥生時代遺物編」2001年
- (9) 山口市教育委員会「赤妻遺跡Ⅱ」1993年
- (10) 山口県文化財愛護協会「岡山遺跡」1987年
- (11) 中村敏也「山口県 綾瀬木郷遺跡」(1)に同じ
- (12) 豊州町史編纂委員会「豊州町史」1979年
- (13) 白岡太「最近の調査から一矢田遺跡」
(財団法人山口県縄文文化財センター「陶魂」第7号 1994年)

圖 版



矢田遺跡遠景（北から）

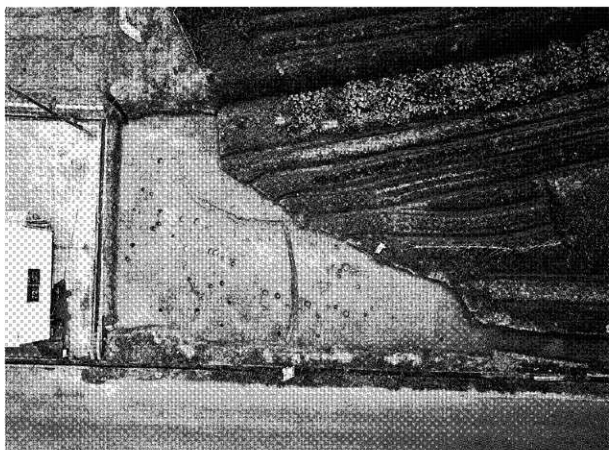


矢田遺跡全景

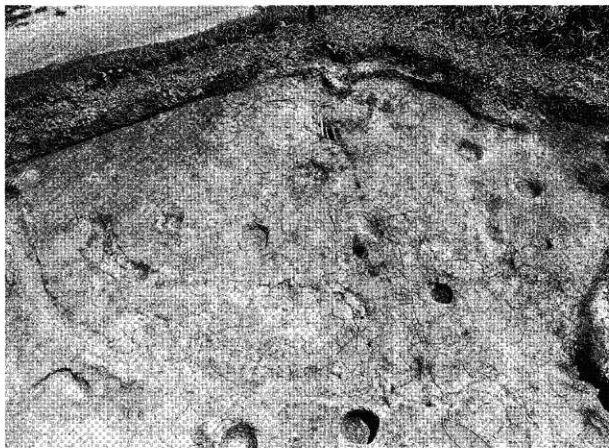
図版 2



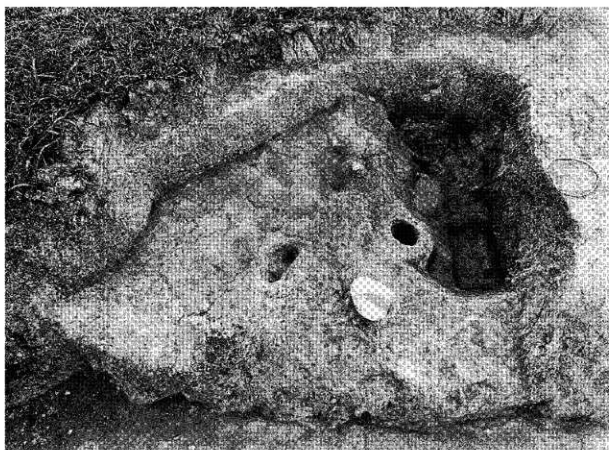
A地区 完損状況



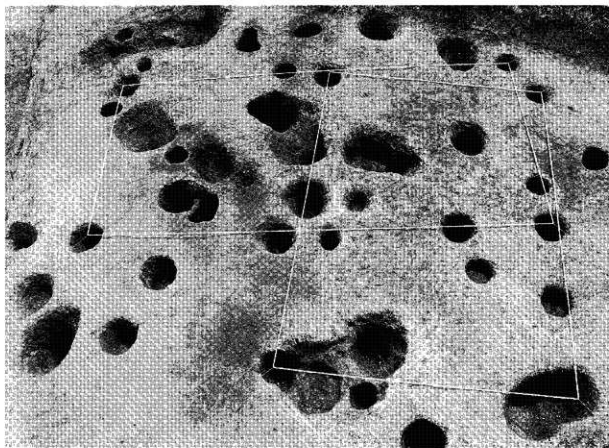
B地区 完損状況



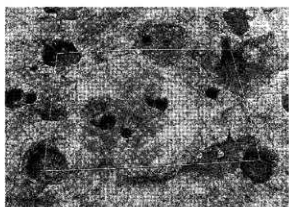
SB 1 完掘状況 (南西から)



SB 9 完掘状況 (東から)



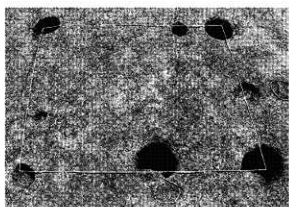
SB 3・6 完掘状況 (東から)



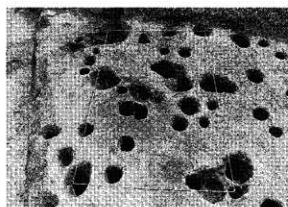
SB 2 完掘状況 (南東から)



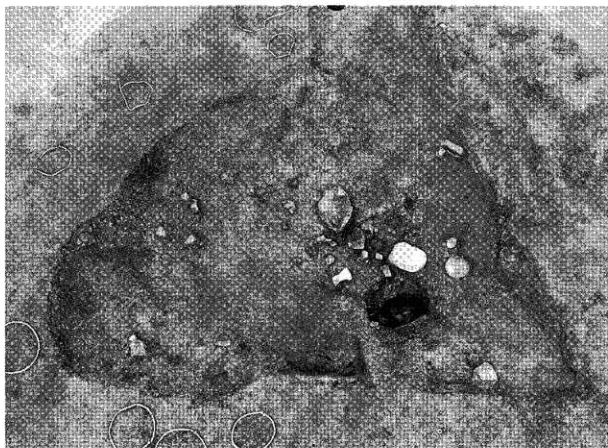
SB 4 完掘状況 (東から)



SB 5 完掘状況 (北から)



SB 8 完掘状況 (北東から)



SK 1 遺物出土状況 (南から)



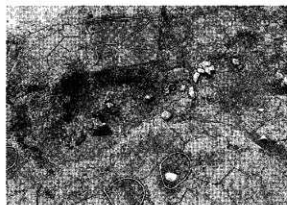
SK 2 遺物出土状況 (東から)



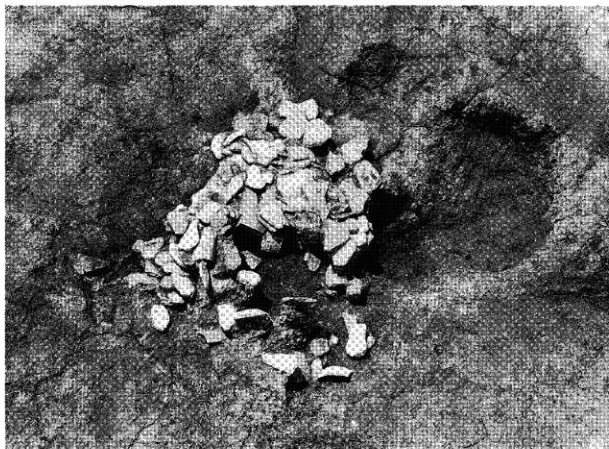
SK 3 遺物出土状況 (東から)



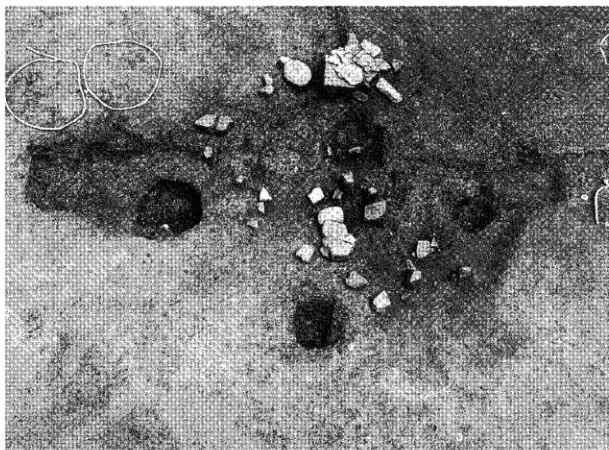
SK 5 遺物出土状況 (北から)



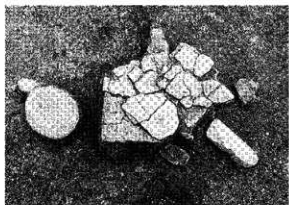
SK 7 遺物出土状況 (南から)



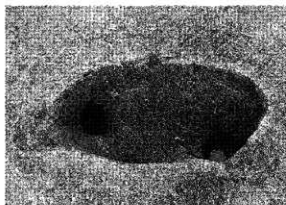
SK 8 遺物出土状況 (東から)



SK 9 遺物出土状況 (西から)



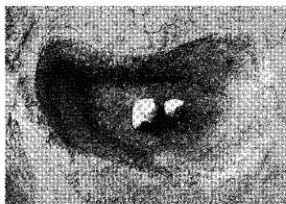
SK 9 遺物出土状況 (西から)



SK 16 完掘状況 (南から)



SK 28 完掘状況 (東から)



SK 30 遺物出土状況 (南から)



SK 29 遺物出土状況 (西から)

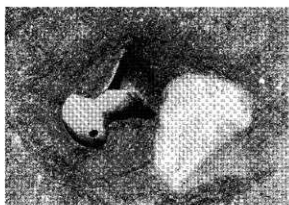
図版 8



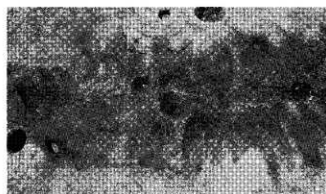
SD 2 遺物出土状況 (東から)



SD 2 遺物出土状況 (西から)



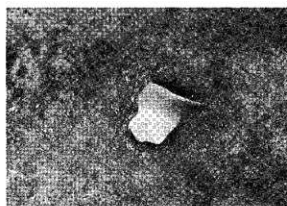
SD 2 土器 (須恵器 甕) 出土状況 (西から)



SD 1 遺物出土状況 (東から)



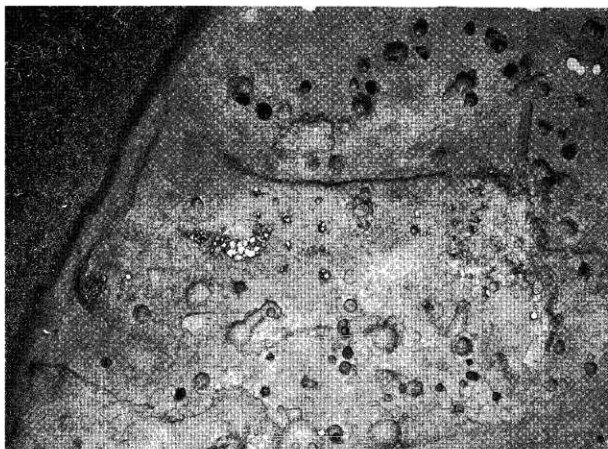
SD 4 遺物出土状況 (西から)



SD 4 土器 (弥生土器 甕) 出土状況 (西から)

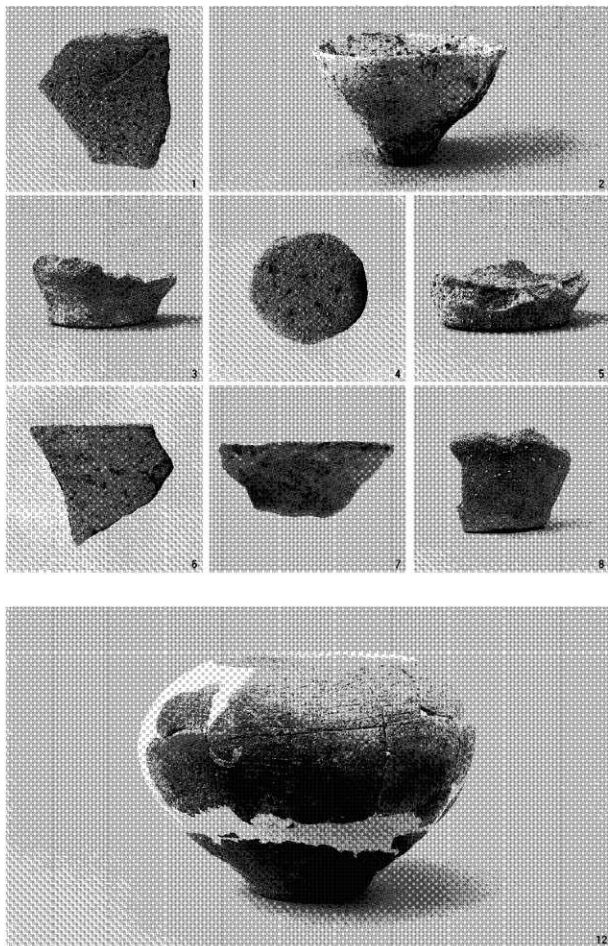


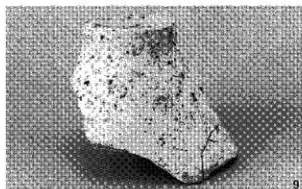
SP177 遺物出土状況 (西から)



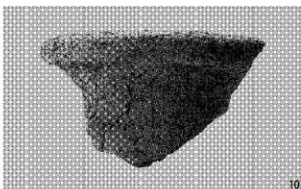
SX3 遺物出土状況 (南東から)

柱穴、不明遺構





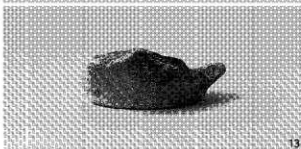
9



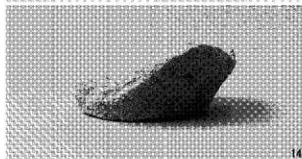
10



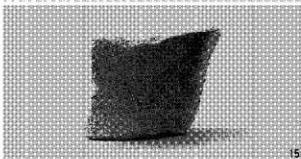
11



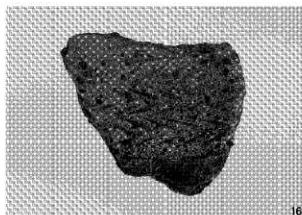
13



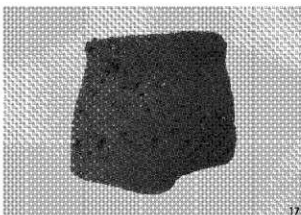
14



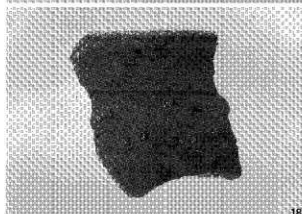
15



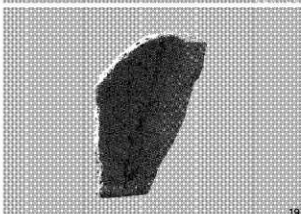
16



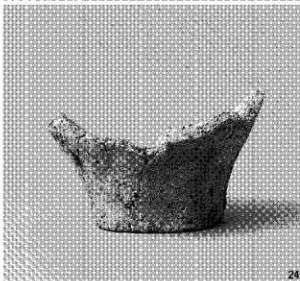
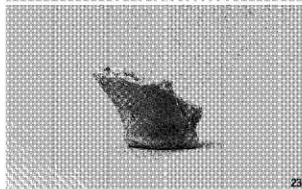
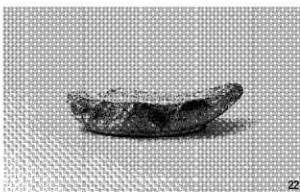
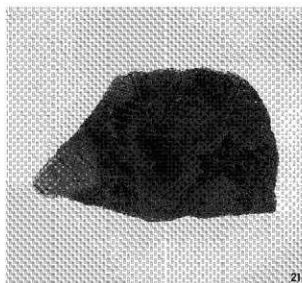
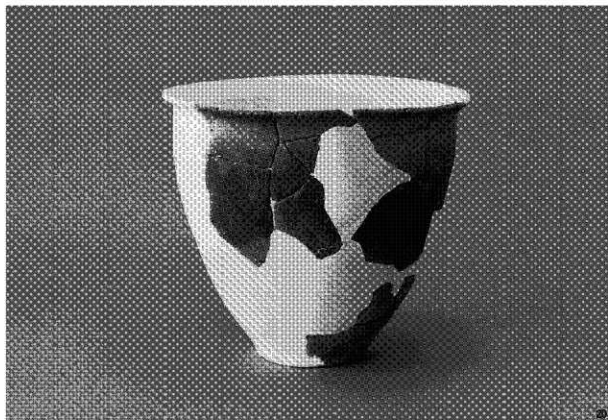
17

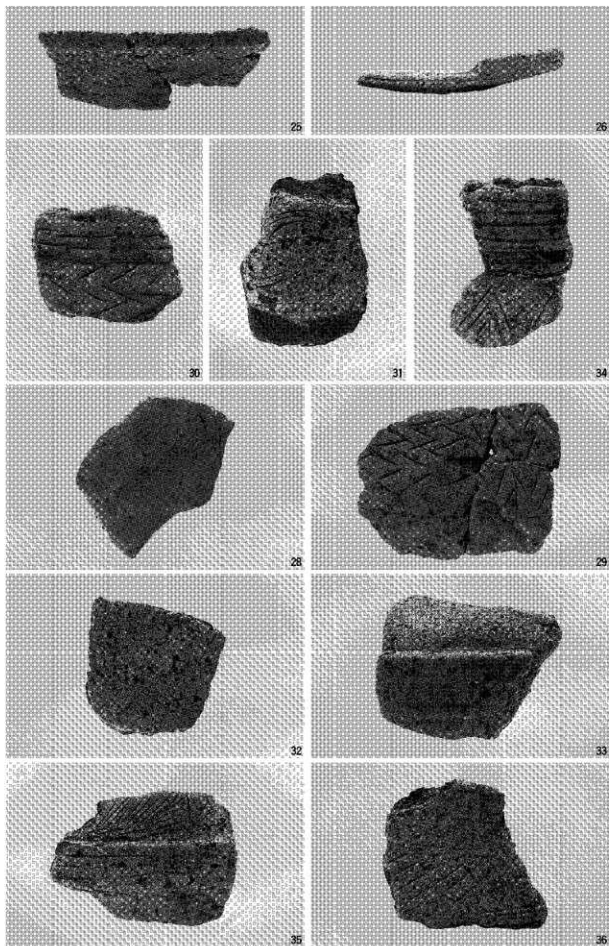


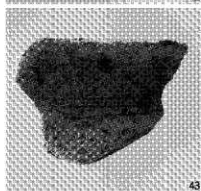
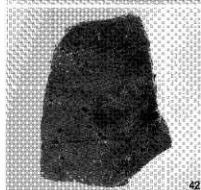
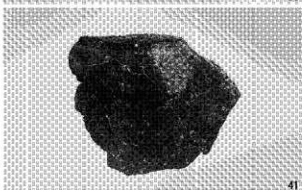
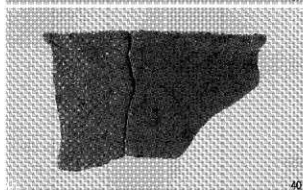
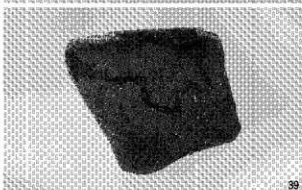
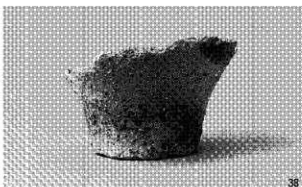
18

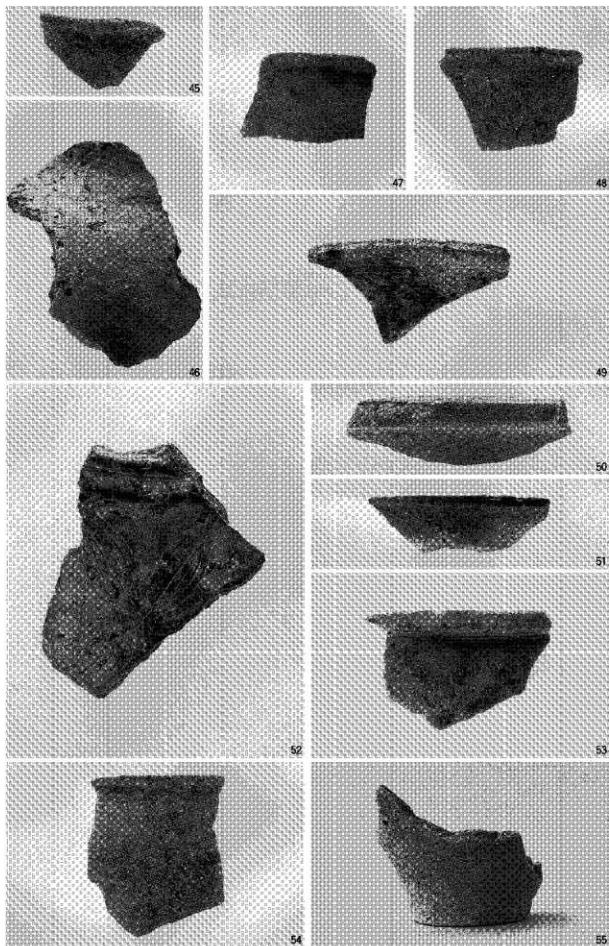


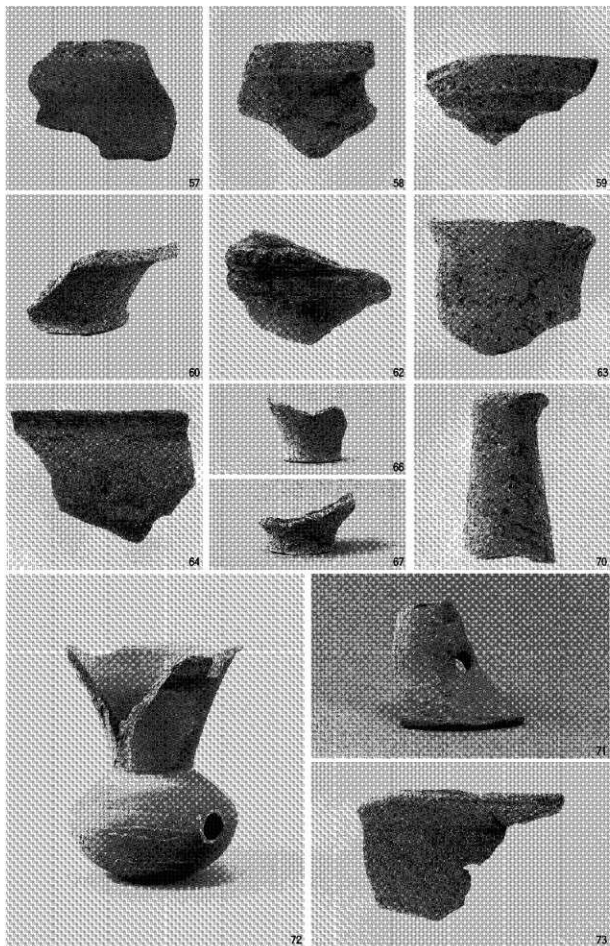
19





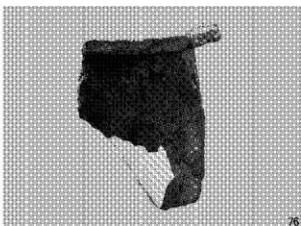




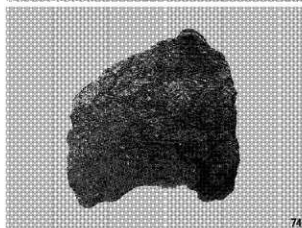




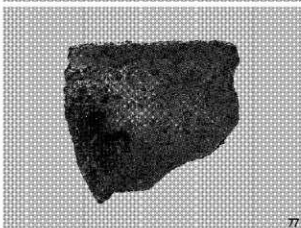
76



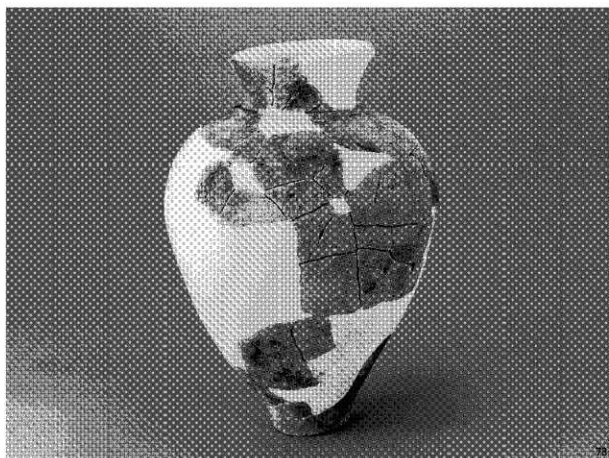
76



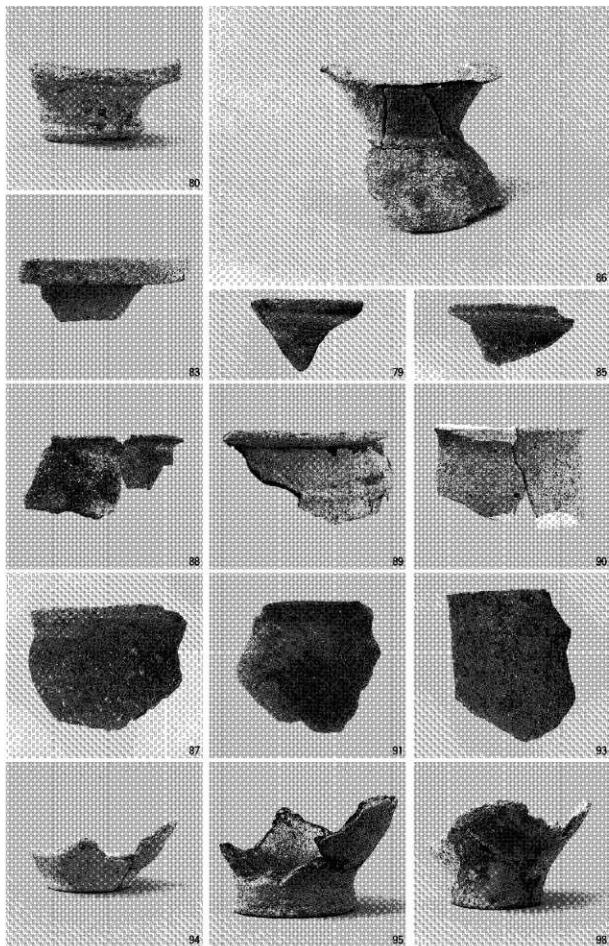
76

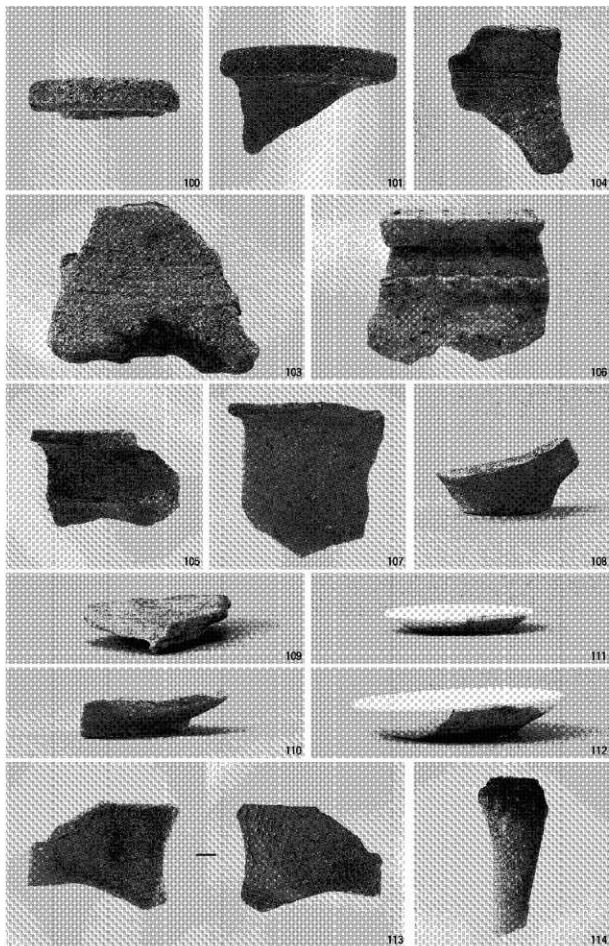


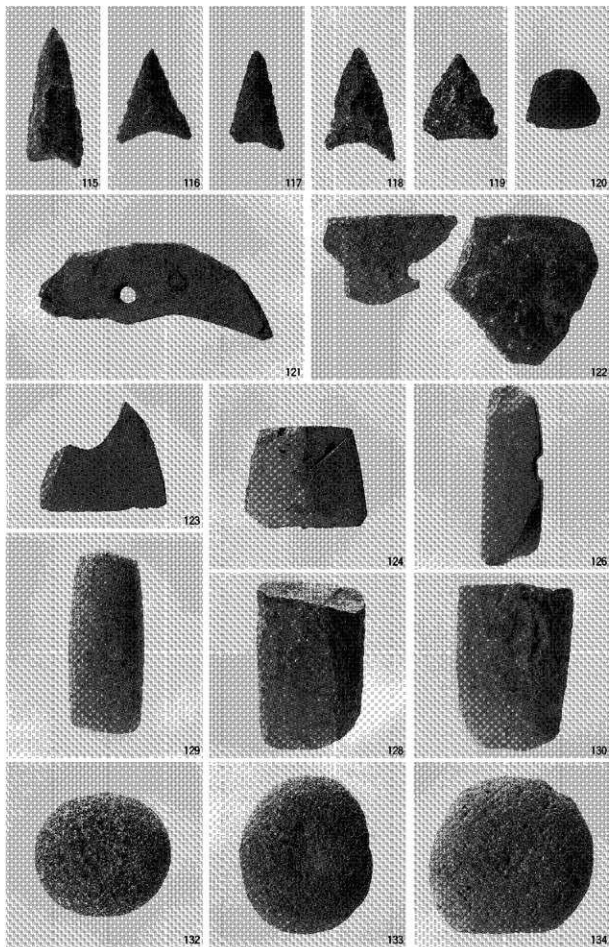
77



78







報告書抄録

ふりがな やたいせき
書 名 矢田遺跡
副 書 名
巻 次
シリーズ名 山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号 第35集
編 著 者 名 椿 英・西尾 健司 有馬 啓介
編 集 機 関 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
所 在 地 〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060
発 行 年 月 日 西暦2003年3月28日(平成15年3月28日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号	北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
矢田遺跡	山口県豊浦郡 豊田町 大字矢田	35442	34°11'59"	131°4'22"	20020415 } 20020717	1,000	道路建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
矢田遺跡	集落跡	弥 生 世 中	竪穴住居 2軒 掘立柱建物 15棟 土坑 40基 溝状遺構 5条 柱穴 約500個 不明遺構 2基	弥 生 土 器 土 師 器 須 恵 器 瓦 質 土 器 上 製 品 石器(鎌、庖丁、斧、 剣、凹石など)	弥生時代前期末 から中期の竪穴住 居をはじめ、掘立 柱建物、土坑、溝 などを検出 中世の掘立柱建 物群を検出

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第35集

矢 田 遺 跡

2003年 3月

編集・発行 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
(〒753-0073 山口市春日町3番22号)

印 刷 泉菊印刷株式会社
(〒752-0927 下関市民府扇町8番48号)